

六朝樂府詠注（二十七）——「長安道」十二首——

小川恒男

はしがき

本稿には『樂府詩集』卷二十三に収める六朝期に作られた「長安道」十二首の詠注を掲載した。梁簡文帝、梁元帝、庾肩吾、陳後主、顧野王、阮卓、蕭賁、徐陵、陳暄、江総、王褒、何妥のそれぞれ一首である。前々稿、前稿の「洛陽道」詠注では橘英範氏「六朝詩に詠じられた洛陽―樂府『洛陽道』を題材として―」（岡山大学文学部プロジェクト研究報告書10『洛陽の歴史と文学』二〇〇八）を参考にさせて頂いたが、「長安道」でも「六朝期『長安道』に詠じられた長安」（『中国文史論叢』第13号 二〇一七）に大いに助けて頂いた。紙面を借りてお礼を申し上げたい。橘氏の論考もあることだし、「長安道」は詠注を作成する必要もないかと一度は考えもし、特に何か新たに加えるところがあった訳でもなかったのだが、ほんの少しだけでも補えるところがあるようでもあり、本稿の継続性のために敢えて屋上に屋を架すこととした。梁代の「洛陽道」では洛陽の路上で繰り広げられる「ボーイ・ミーツ・ガール」の物語が競って描かれたが、長

安の路上では男女の情愛が語られることはほとんどない。梁代の「長安道」では、天子の居処としての長安を華麗壮大に描くことに主眼が置かれているように見える。その結果、班固「西都賦」や張衡「西京賦」の長安を、規模を思いっ切り小さくした上で、「複道」「輦道」「馳道」「大道」など道をキー・ワードに再構成する形式となったように思われる。「道」がキー・ワードであるため、長安近郊にあった上林苑などの苑囿は描写の対象から外れた。また、長安の歓楽街の描写は「長安有狭斜行」が担ったのではないかと考えられる。長安では男女の情愛は路地裏で語られるのである。陳後主は「長安道」でさえも閨怨詩に仕立て上げており、流石に亡国の主は違うなど思わせる。しかし、陳代の「長安道」の多くは長安の路上に歴史上の人物を歩かせるたり、車上の人にしたたりすることを、恐らくは宴席などの場で楽しんだように見える。ほとんどの場合、『漢書』を材料に、長安に関連があつて、何かしらの共通点があるけれども対句を構成するのに相応しい対照的な人物を二人を捜し当てることで遊んでいる。恐らくは宴席などでそのような楽しみ方をしたので

はなかるうかと想像してみると面白い。

二〇二一年は前年よりも状況が更に悪化した。けれども慣れというのは恐ろしいもので、客観的に数値だけ比較すれば、二〇二〇年よりも確実に事態は深刻になっているにも関わらず、個人的にはほとんどの授業を対面で実施することができたためか、なんとなく鷹揚に構えていられるような気がした。それでもいろいろな場面で不自由な事柄に遭遇することは多い。この事態はいつ終息するのか、やはり備忘のために記しておきたい。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）である。本稿でなんとか『樂府詩集』巻二十三までの訳注を作成し終えたことになる。

梁・簡文帝蕭綱「長安道」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|-----|--------|
| 1 神皋開隴右 | 神皋 | 隴右に開け |
| 2 陸海実西秦 | 陸海 | 西秦に実つ |
| 3 金槌抵長樂 | 金槌 | 長樂に抵り |
| 4 複道向宜春 | 複道 | 宜春に向かふ |
| 5 落花依度幃 | 落花 | 度幃に依り |
| 6 垂柳払行人 | 垂柳 | 行人を払ふ |
| 7 金張及許史 | 金・張 | 及び許・史 |
| 8 夜夜尚留賓 | 夜夜 | 尚ほ賓を留む |

【日本語訳】

【作者】

五〇三〜五五一。武帝蕭衍の第三子、南朝梁の第二代皇帝。在位五四九〜五五一。名は綱、字は世縉。昭明太子蕭統の弟。昭明太子が早世すると後を継いで太子となった。侯景の乱で建康が陥落した後、餓死させられた武帝に代わり、侯景によって即位を強制されたが、実権は侯景が握り、単なる傀儡に過ぎなかった。五五一年、侯景を討とうとする王族たちの軍に敗れた侯景は、建康に帰還するや簡文帝を廢して元の晋安王とし、皇太子を始めとする簡文帝の子供たちを抹殺し、昭明太子の孫でまだ幼かった予章王蕭棟を位に即けた。その二ヶ月後、晋安王蕭綱は侯景に殺された。

彼は自らも詩文に優れ、十八年間に及ぶ太子時代を中心に、徐摛・徐陵父子、庾肩吾・庾信父子などを集めて文学サロンを形成した。彼らの軽艶な詩風は「宮体」と呼ばれた。また多くの恋愛詩を集めた『玉台新詠』は彼の命で編集されたものである。

【語釈】

1 神皋開隴右 2 陸海実西秦

「神皋」人知でははかり知れない靈妙なるものすばらしさが集まるところ。漢・張衡「西京賦」(『文選』巻二)に「爾乃広衍沃野、厥田上上、寔惟地之奥区神皋。

(爾して乃ち広衍なる沃野あり、厥の田 上の上、寔に惟れ地の奥区神皋なり。)」とあり、薛綜注は『漢書』

- 1 靈妙で神聖なるものが隴山の西に向かつて開け
- 2 肥沃な土地が西なる秦の地を満たしている
- 3 金属製のつちで築いた天子専用の立派な道が長樂宮ま

だ続き

- 4 二階建ての道が宜春苑にむかつて延びている
- 5 舞い散る花が道を行く馬車のとばりに降りかかり
- 6 垂れたヤナギの枝が道行く人の側をかすめる
- 7 金日磾・張安世・許広漢・史恭・史高のような貴顕のお屋敷では
- 8 車のくさびを投げ捨てて客人を引き留めているだろう

【校勘】

○『文苑英華』巻百九十二。『古詩紀』巻七十七。『漢魏六朝百三家集』巻八十三

- 3 「金槌」、『英華』作「椎輪」、『詩紀』注・底本注・『百三家集』注並云「一作「椎輪」。「長樂」、『英華』作「赤果」、而注云「一作「金槌抵長樂」」。
- 4 「複道」、底本注云「一作「復道」」。
- 6 「人」、『詩紀』『百三家集』均作「輪」、而注並云「一作「人」」。
- 7 「及」、『英華』作「与」、而注云「一作「及」」。

【押韻】

「秦」「春」「人」「賓」、下平七歌韻。

郊祀志上に「自古以雍州積高、神明之隩、故立時郊上帝、諸神祠皆聚云。(古へより雍州の積高にして、神明の隩なるを以て、故に時を立てて上帝を郊り、諸神祠皆な聚まると云ふ。)」とあるのを引く。

「隴右」隴山(現在の甘肅省六盤山)から西、黄河の東側一帯の地。『後漢書』光武帝紀上に「赤眉殺更始、而隗囂拠隴右、盧芳起安定。(赤眉 更始を殺し、而して隗囂 隴右に拠り、盧芳 安定に起つ。)」とあり、梁・吳均「和蕭洗馬子顯古意」詩六首(『玉台』巻六)其四に「何処報君書、隴右五歧路(何れの処にか 君の書に報ぜん、隴右 五歧の路)」と見える。

「陸海」物産の豊かな土地。『漢書』地理志下に「秦地」有鄠・杜竹林、南山檀・柘、号称陸海、為九州膏腴。(秦地)鄠・杜の竹林、南山の檀・柘有り、号して陸海と称し、九州の膏腴と為す。とあり、顔師古注に「言其地高陸而饒物産、如海之無所不出。故云陸海。(其の地 高陸にして物産饒かなること、海の出ださざる所無きが如きを言ふ。故に陸海と云ふ。)」という。また、漢・班固「西都賦」(『文選』巻一)「陸海珍藏、藍田美玉。(陸海の珍藏、藍田の美玉あり。)」とあり、李善注は『漢書』東方朔伝に「漢興、去三河之地、止灊・滻以西、都涇・渭之南。此所謂天下陸海之地。(漢興り、三河の地を去り、灊・滻以西に止まりて、涇・渭の南に都す。此れ所謂天下陸海の地なり。)」とあるのを引く。

「西秦」中原から見て西方にある秦の地。張衡「西京賦」(『文選』卷二)に「是時也、並為疆国者有六、然而四海同宅西秦、豈不詭哉。(是の時や、並びに疆国為る者六有り、然り而して四海 同に西秦に宅るは、豈に詭しからずや。)」とある。また、曹植「門有万里客」に「行行復行、去去適西秦(行き行きて將に復た行かんとし、去り去りて西秦に適く)」と見える。

3 金槌抵長樂 4 複道向宜春

「金槌」鉄の槌。天子が通る道である馳道を高く頑丈にするのに用いた。転じて馳道をいう。顧炎武『日知錄』卷十八「勘書」に「梁簡文帝『長安道』詩、『金椎抵長樂、複道向宜春』。是用『漢書』賈山伝『隱以金椎、樹以青松、為馳道之麗至於此』。『三輔決錄』『長安十二門、三途洞開、隱以金椎、周以林木、左出右入、為往來之徑』。今誤作『金槌』、而又改為『椎輪』。(梁簡文帝『長安道』詩に、『金椎 長樂に抵り、複道 宜春に向かふ』と。是れ『漢書』賈山伝の『隱くに金椎を以てし、樹うるに青松を以てして、馳道を為るの麗 此に至る』を用ふ。『三輔決錄』に『長安十二門、三途洞開し、隱くに金椎を以てし、周らすに林木を以てし、左より出で右より入り、往來の徑と為す』と。今誤りて『金槌』に作り、而して又た改めて『椎輪』と為す。)とある。「槌」は「椎」に通じるようになるが、楊雄『方言』に「槌、宋魏陳楚江淮之間、謂之植。(槌、

宋魏陳楚江淮の間、之れを植と謂ふ。)」とあり、郭璞注に「果蚕薄柱也。(蚕薄を果くるの柱なり。)」(「果」、『四部叢刊』本作「糸」。戴震『方言疏證』改作「縣」、今從之。)とあるのに拠れば蚕棚を支える柱。また、『說文解字』六篇上・木部に「椎、擊也。」とあるが、段玉裁はこれを「椎、所目擊也。」に改める。

「長樂」漢の宮殿の名、長樂宮。班固「西都賦」に「自未央而連桂宮、北彌明光而互長樂。(未央よりして桂宮に連なり、北のかた明光を彌りて長樂に互る。)」とあり、李善注は『漢書』高帝紀下に「後九月、徙諸侯子関中。治長樂宮。(後九月、諸侯の子を関中に徙す。治長樂宮を治む。)」(「治」、李善注作「修」。)とあるのを引く。植木久行編『中国詩跡事典』(二〇一五 研文出版)に「漢長安城」前漢の高祖五年(前二〇二)、劉邦は帝位に即くと、都城・長安の建造に着手した。選ばれた場所は、渭水の南、龍首原の高台の地で、秦の都・咸陽城のほぼ真南に当たる(現・西安市西北の未央区「漢城街道・未央宮街道」)。まず長樂宮が造営され、都が長安に遷された前二〇〇年、未央宮が竣工し、その一〇年後、恵帝劉盈のころ、城壁が完成した。武帝劉徹の時代(前一四一―前八七年)に、北宮・桂宮・明光宮の各宮殿が建てられ、城外に建章宮・上林苑などが造られた。とある。陳後主叔宝「長安道」にも「建章通未央、長樂属明光(建章 未央に通じ、長樂 明光に属く)」とある。

「複道」楼閣間に架けられた廊下。上下二層になっており、上を天子、下を臣下が歩いた。閣道、復道とも。

『漢書』高帝紀下に「上居南宮、從復道上。(上 南宮に居り、復道より上る。)」とあり、顔師古注は如淳の説を引いて「復音複、上下有道、故謂之復。(復 音複、上下に道有り、故に之れを復と謂ふ。)」という。

『史記』秦始皇本紀に「為複道、自阿房渡渭、属之咸陽、以象天極閣道絶漢抵宮室也。(複道を為り、阿房より渭を渡り、之れを咸陽に属け、以て天極の閣道の漢を絶り宮室に抵るに象るなり。)」と見える。また、庾肩吾「賦得横吹曲長安道」(『玉台』卷八)に「桂宮連複道、黄山開広路(桂宮 複道連なり、黄山 広路開く)」と。

「宜春」苑園の名。また宮殿の名。『史記』司馬相如伝に「上善之。還過宜春宮。(上 之れを善す。還た宜春宮を過ぐ。)」とあり、『素隠』は「括地志」を引いて「秦宜春宮在雍州万年県西南三十里、宜春苑在宮之東、杜之南。(秦の宜春宮 雍州万年県の西南三十里に在り、宜春苑 宮の東、杜の南に在り。)」という。また、司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)に「下棠梨、息宜春。(棠梨に下り、宜春に息ふ。)」とあり、郭璞注に「宜春、宮名、在渭南杜県東。(宜春、宮名、渭南の杜県の東に在り。)」とある。詩では梁・王訓「独不見」に「日晚宜春暮、風軟上林朝(日は晩る 宜春の暮れ、風は軟らし 上林の朝)」と。

5 落花依度幃 6 垂柳払行人

「落花」舞い散る花。梁簡文帝「春日」詩に「落花随燕入、游糸带蝶驚(落花 燕に随ひて入り、游糸 蝶を帯びて驚く)」と見えるように春のイメージを伴う。

「度幃」道を行く車。「幃」は『說文解字』巾部に「車幃也。」とあり、車のとばりのこと。転じて車のこと。梁簡文帝「春日想上林」詩に「香車雲母幃、駛馬黄金羈(香車 雲母の幃、駛馬 黄金の羈)」と雲母で飾られたカーテンを付けた馬車が描かれる。

「垂柳」春になり伸びた枝が垂れ下がったヤナギ。梁簡文帝「雍州曲」三首(『玉台』卷七)・北渚に「岸陰垂柳葉、平江含粉蝶(岸陰 柳葉垂れ、平江 粉蝶を含む)」と。「落花」「垂柳」いずれも梁代から盛んに用いられるようになった詩語だが、前句の「宜春」からの連想だろうか。また、梁簡文帝「送別」詩に「水苔随纜聚、岸柳払舟垂(水苔 纜に随ひて聚まり、岸柳 舟を払ひて垂る)」と。

「行人」道を行く人。梁・聞人倩「春日」詩(『玉台』卷八)に「行人今不返、何劳空折麻(行人 今 返らず、何ぞ劳せん 空しく麻を折るを)」(「行人」、『古詩紀』卷百四作「人行」。)とあるように、閨怨詩では春になりなかなか帰って来ない人待つ女性の目に映る道行く人をいう。

7 金張及許史 8 夜夜尚留賓

「金張及許史」権力を持つ高位高官をいう。楊雄「解嘲」〔『文選』卷四十五〕に「有談范蔡之説於金張許史之間、則狂妄矣。（范蔡の説を金張許史の間に談するもの有れば、則ち狂せり。）」とあり、李善注に「金日磾・張安世・許広漢・史恭・史高也。」とある。金日磾と張安世は武帝、宣帝の頃の寵臣。許広漢と史恭、史高父子は外戚として権力を掌握した。また、晋・左思「詠史」詩八首〔『文選』卷三十一〕其四に「朝集金張館、暮宿許史廬（朝に金張の館に集ひ、暮に許史の廬に宿る）」とあり、李善注は『漢書』蓋寛饒伝に「上無許史之属、下無金張之託。（上に許史の属無く、下に金張の託無し。）」とあるのを引く。

〔夜夜〕夜ごと夜ごとに。謝朓「秋夜」詩〔『玉台』卷四〕に「思君隔九重、夜夜空佇立（君を思ふも九重を隔て、夜夜 空しく佇立す）」と見える。

〔留賓〕客人を引き留める。『漢書』游侠伝・陳遵に「遵耆酒、每大飲、賓客满堂、輒閉門、取客車轄投井中、雖有急、終不得去。（遵 酒を耆み、毎に大飲し、賓客 堂に満つれば、輒ち門を閉ぢ、客の車轄を取りて井中に投じ、急有りと雖も、終に去るを得ざらしむ。）」とある故事に基づくだろう。また、梁・劉孝綽「賦得照葉燭詩刻五分成」詩〔『玉台』卷八〕に「南皮弦吹罷、終奕且留賓（南皮 弦吹 罷み、終奕 且く賓を留む）」と。

○『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷八十。

1 「楸」、『英華』作「楸」。

【押韻】

「津」「塵」、上平十七真韻。「輪」「春」、上平十八諄韻。真・諄同用。

【作者】

五〇八〜五五四。梁の第三代皇帝（在位五五二〜五五四）。武帝（蕭衍）の第七子、昭明太子蕭統、簡文帝蕭綱の異母弟。湘東王に封ぜられ、江陵に鎮して重きをなし、簡文帝を擁する侯景に対抗した。外からは西魏の侵攻を受け、王室内部の抗争もあって、在位二年あまりで没した。『金樓子』六卷をはじめとする多くの著作がある知識人であり、詩作もよくした。

【語釈】

1 西接長楸道 2 南望小平津

〔西接〕西はくにつながっている。三国魏・王粲「登樓賦」〔『文選』卷十一〕に「北彌陶牧、西接昭丘。（北のかた陶牧を彌り、西のかた昭丘に接す。）」と。

〔長楸道〕高く成長したヒサギが植えられた道。「長楸」は『楚辞』九章・哀郢に「望長楸而太息兮、涕淫淫其若霰（長楸を望みて太息し、涕 淫淫として其れ霰の若し）」とあり、王逸注に「長楸、大梓。言己願望楚

梁・元帝蕭繹「長安道」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|-------------|
| 1 西接長楸道 | 西のかた長楸の道に接し |
| 2 南望小平津 | 南のかた小平の津を望む |
| 3 飛甍臨綺翼 | 飛甍 綺翼に臨み |
| 4 輕軒影画輪 | 輕軒 画輪に影る |
| 5 鵬鞍承赭汗 | 鵬鞍 赭汗を承け |
| 6 槐路起紅塵 | 槐路 紅塵起こる |
| 7 燕姬雜趙女 | 燕姬 趙女を雜へ |
| 8 淹留重上春 | 淹留して上春を重ねん |

【日本語訳】

- 1 長安は西は高いヒサギの木が植えられた道に繋が
- 2 南は小平の渡し場をひかえている
- 3 瓦屋根を乗せた建物は鳥の美しい翼を見下ろすほど高く
- 4 小型の軽快な車が色鮮やかな車輪の側をサッと通り過ぎて影を映す
- 5 美しく立派な鞍が馬の赤い汗を承け
- 6 エンジュが植えられた大通りに土埃が舞い上がる
- 7 燕や趙の美しい女性に相伴を願って
- 8 来年の華やかな春正月まで流連したいものだ

【校勘】

都、見其大道長樹、悲而太息。（長楸は、大梓なり。己に楚都を願望し、其の大道長樹を見て、悲しみて太息するを言ふ。）とある。また、曹植「名都篇」に「鬬鷄東郊道、走馬長楸間（鷄を鬬はす 東郊の道、馬を走らす 長楸の間）」とあり、李周翰注に「古人種楸於道、故曰『長楸』。（古人 楸を道に種う、故に『長楸』と曰ふ。）」というように街路樹としてよく植えられた樹木である。「長楸道」と次の句の「小平津」は洛陽と結び付きの強い語だが、『芸文類聚』卷四十二に引く曹植「名都篇」は「鬬鷄東郊道」を「鬬鷄長安道」に作り、『樂府詩集』卷六十三も「東郊」注に「一作『長安』とあるので、或いはここからの連想だったかもしれない。

〔南望〕南の方を眺めやる。晋・陸機「赴洛」二首〔『文選』卷二十六〕其一到「南望泣玄渚、北邁涉長林（南に望みて玄渚い泣き、北に邁きて長林を渉る）」と。〔小平津〕黄河に設けられた関所の名。洛陽の北東、今の河南省孟津県の東北にあった。『後漢書』靈帝紀に「置八関都尉官。（八関都尉の官を置く。）」とあり、李賢注に「八関は謂函谷・広城・伊闕・大谷・轅轅・旋門・小平津・孟津也。（八関は函谷・広城・伊闕・大谷・轅轅・旋門・小平津・孟津を謂ふなり。）」といい、陳・江総「洛陽道」二首其二に「喧喧洛水滨、鬱鬱小平津（喧喧たり 洛水の浜、鬱鬱たり 小平津）」と見えた。右に述べたように洛陽との結び付きが強いが、呉均「携

手曲（『玉台』巻六）に「鷄鳴上林苑、薄暮小平津（鷄鳴には上林苑、薄暮には小平津）」と、長安近郊にあった「上林苑」と対で用いた例がある。

3 飛薨臨綺翼 4 輕軒影面輪

「飛薨」高い屋根の瓦。謝朓「鼓吹曲」（『文選』巻二十八。『謝宣城詩集』（『四部叢刊』本）作「鼓吹曲・入朝曲」）に「飛薨夾馳道、垂楊蔭御溝（飛薨 馳道を夾み、垂楊 御溝を蔭ふ）」とあり、李善注は左思「呉都賦」（『文選』巻五）に「長干延属、飛薨舛互。（長干 延属し、飛薨 舛互す。）」とあるのを引く。その劉逵注は「飛薨舛互、言室屋之多相連下之貌。（飛薨 舛互すとは、室屋の多きこと 相ひ連なりて下るの貌を言ふ。）」という。

「臨綺翼」鳥の美しい翼を見下ろすほど高い。謝朓「臨高台」に「千里常思帰、登台臨綺翼（千里 常に帰らんことを思ひ、台に登りて綺翼に臨む）」（『臨』、『謝宣城詩集』（『四部叢刊』本）作「瞻」）とある。「綺翼」は美しい模様のある羽毛。またそのような羽毛を持つ鳥。晋・潘岳「射雉賦」（『文選』巻九）に「鸞綺翼而輕擗、灼繡頸而哀背。（鸞たる綺翼ありて輕擗あり、灼たる繡頸ありて哀背あり。）」とあり、徐爰注に「鸞、文章貌也。…翼如綺文。（鸞、文章の貌なり。…翼 綺文の如し。）」と。一方、陳志平・熊清元校注『蕭繹集校注』（上海古籍出版 二〇一八）は班固「西

都賦」（『文選』巻一）に「列禁櫟以布翼、荷棟桴而高驤。（禁櫟を列ねて以て翼を布き、棟桴を荷ひて高く驤る。）」とあり、李善注引『說文解字』に「翼、屋榮也。」とあるのを引き、さらに『說文解字』木部・榮の「一曰屋栢之兩頭起者為榮。（一に曰く 屋栢の両頭 起つる者を榮と為す。）」を引いて、「翼」を建物の高い所にある簷とする。

「輕軒」小さく軽快に走る車。張衡「東京賦」（『文選』巻三）に「乃御小戎、撫輕軒。（乃ち小戎を御し、輕軒に撫る。）」とあり、薛綜注は『詩經』秦風・小戎に「小戎 棧収、五檠梁輈（小戎 棧収、梁輈を五檠す）」とあるのを引き、「謂小戎之車輕便宜田獵。（小戎の車 輕便にして田獵に宜しきを謂ふ。）」という。また、陸機「挽歌」詩三首（『文選』巻二十八）其一到「翼翼飛輕軒、駸駸策素駟（翼翼として輕軒を飛ばし、駸駸として素駟に策つ）」と。

「面輪」鮮やかに彩られた車輪。また画輪車。梁簡文帝蕭綱「傷離新体」詩（「新」、『六朝詩集』作「雜」）に「落日斜飛蓋、余暉承面輪（落日 飛蓋に斜めにして、余暉 面輪に承く）」とある。また、『晋書』輿服志に「画輪車、駕牛、以彩漆画輪轂。故名曰画輪車。（画輪車、牛を駕け、彩漆を以て輪轂に画く。故に名づけて画輪車と曰ふ。）」とある。

5 鵬鞍承赭汗 6 槐路起紅塵

「鵬鞍」彫られた模様が美しい鞍。「鵬」は「雕」の別体で「彫」に通じる。陳・徐陵「驄馬駟」（白馬号龍駒、雕鞍名鏤渠（白馬 龍駒と号づけ、雕鞍 鏤渠と名づく））と見える。

「赭汗」駿馬が流す赤い汗。汗血馬が流す汗。梁簡文帝「繫馬」詩に「青驪沈赭汗、緑地懸花蹄（青驪 赭汗に沈み、緑地 花蹄に懸かる）」とある。また、北周・庾信「王昭君」に「衫身承馬汗、紅袖払秋霜（衫身 馬汗を承け、紅袖 秋霜を払ふ）」と見える。

「槐路」都のエンジュが植えられた大通り。『芸文類聚』巻三十八に引く『三輔黃圖』に「去城七里、東為常滿倉、倉之北為槐市、列槐樹數百行、為隴、無墻屋。（城を去ること七里、東を常滿倉と為し、倉の北を槐市と為し、槐樹を列めること數百行、隴を為して、墻屋無し。）」と見える。

「紅塵」馬や馬車がたてる土埃。都会の喧噪をいう。班固「西都賦」（『文選』巻一）に「紅塵四合、煙雲相連。（紅塵 四合し、煙雲 相ひ連なる。）」とあり、李善注は「李陵詩曰、『紅塵塞天地、白日何冥冥』（李陵詩に曰く、『紅塵 天地を塞ぎ、白日 何ぞ冥冥たる』と。）」とする。陳・張正見「洛陽道」にも「紅塵暮不息、相看連騎稀（紅塵 暮れに息まず、相ひ看る 連騎の稀なるを）」と見える。

7 燕姬雜趙女 8 淹留重上春

「燕姬」燕（今の河北省を中心とする地域）出身の美しい女性。「古詩十九首」（『文選』巻二十九）其十二に「燕趙多佳人、美者顏如玉（燕趙 佳人多く、美なる者 顔 玉の如し）」とあり、宋・鮑照「舞鶴賦」（『文選』巻十四）に「當是時也、燕姬色沮、巴童心恥。（是の時に当たるや、燕姬 色 沮み、巴童 心 恥づ。）」と見える。

「趙女」趙（今の山西省を中心とする地域）出身の美しい女性。『戦国策』中山策に「（司馬憲）…、見趙王曰、『臣聞、趙天下善為音佳麗人之所出也。（司馬憲）…、趙王に見えて曰く、『臣 聞く、趙は天下の善く音を為すの佳麗の人の出づる所なりと。』』と見える。

「淹留」逗留する。語は『楚辭』離騷に「時續紛其變易兮、又何可以淹留（時 續紛として 其れ変易し、又た何ぞ以て淹留すべけん）」と見えるが、ここは妓楼に流連することを言う。北周・王褒「古曲」に「青樓臨大道、遊俠尽淹留（青樓 大道に臨み、遊俠 尽く淹留す）」とあるのもこの用法だろう。

「上春」孟春に同じ。旧暦の正月。『周礼』春官・天府に「上春、釁宝鎮及宝器。（上春、宝鎮 及び宝器に釁ぬる。）」とあり、鄭玄注に「上春、孟春也。」とある。また齊・江孝嗣「離夜」詩に「離歌上春日、芳思徒以空（離歌 上春の日、芳思 徒に以て空し）」と見える。

梁・庾肩吾「長安道」

【本文及び書き下し】

- 1 桂宮延復道 桂宮 復道延び
- 2 黃山開広路 黃山 広路開く
- 3 遠聴平陵鐘 遠く聴く 平陵の鐘
- 4 遙識新豐樹 遙かに識る 新豐の樹
- 5 合殿生光彩 合殿 光彩を生じ
- 6 離宮起煙霧 離宮 煙霧起る
- 7 日落歌吹回 日 落ちて 歌吹 回り
- 8 塵飛車馬度 塵 飛びて 車馬 度る

【日本語訳】

- 1 桂宮までは上下二層になった天子専用の道が続き
- 2 黃山宮までは大通りが開けている
- 3 遠くから平陵の鐘の音に耳を傾け
- 4 離れたところからでも新豐の樹木が見分けられる
- 5 長安城内の宮殿には色鮮やかな輝きが生じ
- 6 離宮では霧が立ち籠める
- 7 日が暮れる頃、歌と笛の音を響かせてお帰りにすると
- 8 車馬が通り過ぎるにつれて土埃が舞い上がる

【校勘】

○『玉台新詠』卷八。『芸文類聚』卷四十二。『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷九十。

0 「長安道」、『玉台』『詩紀』作「賦得横吹曲長安道」。

『類聚』作「長安路」。

- 1 「延」、『詩紀』作「連」。「複」、底本注云「一作『復』」。
- 7 「歌吹」、『類聚』作「唱歌」。「回」、『玉台』『類聚』『詩紀』作「還」、而『詩紀』注云「一作『回』」。

【押韻】

「路」「度」、去声十一暮韻。「樹」「霧」、去声十遇韻。遇・暮同用。

【作者】

四八七～五五一。字は子慎、新野の人。庾信の父。天監八（五〇九）年晋安王蕭綱の常侍となり、以後常に蕭綱の府にあつてその文学集団の主要人物のひとりとなった。太清二（五四八）年、侯景が建康を陥落させ、翌年簡文帝蕭綱を即位させた。庾肩吾は江州刺史であつた蕭繹の下に逃れたが、まもなく卒した。

庾肩吾は宮体詩の代表的な詩人であり、徐摛とともに徐庾体と称されたが、清・陳祚明『采菽堂古詩選』卷二十五に「調叶声諧、自然流暢。」と評するように、特に声律の整つた詩を作った。

【語釈】

1 桂宮延復道 2 黃山開広路

「桂宮」漢代の宮殿名。班固「西都賦」に「自未央而連桂宮、北彌明光而互長樂。（未央よりして桂宮に連なり、

北のかた明光を彌りて長樂に互る。）」と見え、『三輔黃圖』卷二「漢宮」に「桂宮、漢武帝造、周回十余里。『漢書』曰、『桂宮有紫房復道、通未央宮』。（桂宮、漢の武帝 造り、周回 十余里。『漢書』に曰く、『桂宮に紫房復道有り、未央宮に通ず。』）」とある。また、梁簡文帝「傷離新体」詩に「桂宮夕掩銅龍扉、甲館宵垂雲母幃（桂宮 夕べに掩ふ 銅龍の扉、甲館 宵に垂る 雲母の幃）」と見える。

「黃山」漢代の宮殿の名。陝西省咸陽市興平市。漢・楊雄「羽獵賦」序（『文選』卷八）に「北繞黃山、浜渭而東、周表數百里。（北のかた黃山を繞り、浜渭に浜ひて東し、周表 數百里なり。）」とあり、李善注は『漢書』地理志上・右扶風・槐里県に「有黃山宮、孝惠二年起。（黃山宮有り、孝惠二年 起つ。）」とあるのを引く。

「広路」大通り。班固「西都賦」に「披三条之広路、立十二之通門。（三条の広路を披き、十二の通門を立つ。）」と長安の描写中に見え、梁・顧野王「長安道」にも「鳳樓臨広路、仙掌入煙霞（鳳樓 広路に臨み、仙掌 煙霞に入る）」とある。

3 遠聴平陵鐘 4 遙識新豐樹

「遠聴」遠くの音に耳を傾ける。齊・謝朓「落日同何儀曹煦」詩に「遠聴雀声聚、回望樹陰杳（遠く聴く 雀声の聚まるを、回望す 樹陰の杳なるを）」とあり、

梁簡文帝「傷離新体」詩に「遠聴寂無聞、遙瞻目有関（遠く聴くも寂として関こゆる無く、遙かに瞻るも目に関ぐる有り）」とある。

「平陵鐘」漢の昭帝の陵墓にあつた鐘。「平陵」は『三輔黃圖』卷六「陵墓」に「昭帝平陵、在長安西北七十里。（昭帝の平陵、長安の西北七十里に在り。）」とあり、現在の咸陽市の西北に位置する。また、『太平御覽』卷五百七十五に引く潘岳『関中記』に「漢昭帝平陵・宣帝杜陵、二陵鐘在長安。夏侯征西欲徙詣洛陽、重不能致、懸清明門門裏道南。其西者平陵鐘、東者杜陵鐘也。（漢の昭帝の平陵・宣帝の杜陵、二陵の鐘 長安に在り。夏侯征西 徙して洛陽に詣らしめんと欲するも、重くして致す能はず、清明門の門裏の道南に懸く。其の西なる者は平陵の鐘、東なる者は杜陵の鐘なり。）」とあるのに拠れば、「平陵鐘」は長安城の東側にあつた三門の内、中央の「清明門」の内側にあつたこととなるが、ここは文字通り「平陵」にあつたこととして詠じたのだろう。「鐘」は「鐘」に通じる。

「遙識」遠くからでも見分けられる。梁・何遜「学古贈丘永嘉征還」詩に「窺見応門出、遙識下機人（窺ひ見る 応門の出づるを、遙かに識る 機を下る人を）」とある。

「新豐樹」新豐に植えられた樹。長安の地で最も古い木立のひとつだつたろう。「新豐」は『西京雜記』卷二に「太上皇徙長安、居深宮、悽愴不樂。高祖窃因左右問

其故、以平生所好、皆屠販少年、酤酒壳餅、鬪鷄蹴鞠、以此為懽、今皆無此、故以不樂。高祖乃作新豐、移諸故人実之、太上皇乃悦。故新豐多無頼。無衣冠子弟故也。高祖少時、常祭粉榆之社。及移新豐、亦還立焉。高帝既作新豐、并移旧社、衢巷棟宇、物色惟旧。士女老幼、相携路首、各知其室。放犬羊鷄鴨於通塗、亦競識其家。(太上皇 長安に徙り、深宮に居りて、悽愴として樂します。高祖 窃かに左右に因りて其の故を問ふに、平生の好む所、皆な屠販の少年にして、酒を酤り餅を売り、鬪鷄蹴鞠して、此れを以て懽びと為すも、今 皆な此れ無きを以て、故に以て樂しますと。高祖 乃ち新豐を作り、諸故人を移して之れを實たせば、太上皇 乃ち悦ぶ。故に新豐 無頼多し。衣冠無きの子弟の故なり。高祖 少き時 常に粉榆の社を祭る。新豐に移すに及び、亦た還た立つ。高帝 既に新豐を作り、并せて旧社を移せば、衢巷棟宇、物色 惟れ旧なり。士女老幼、路首に、相に携ふれば、各おの其の室を知る。犬羊鷄鴨を通塗に放たば、亦た競ひて其の家を識る。)と見えるように、漢の高祖劉邦が父を慰めるために故郷の豊(江蘇省徐州市豊県)の街並をそのまま移した新しい街。現在の陝西省西安市臨潼区。陳後主「長安道」にも「遊蕩新豐裏、戲馬渭橋傍(遊蕩す 新豐の裏、戲馬す 渭橋の傍)」とあり、陳・張正見の「怨詩」にも「新豐妖冶地、遊俠競嬌奢(新豐妖冶の地、遊俠 嬌奢を競ふ)」とあって、遊興の地

賈山伝にも「秦非徒如此也。起咸陽而西至雍、離宮三百、鐘鼓・帷帳、不移而具。(秦 徒だ此くの如きみに非ざるなり。咸陽に起こして西のかた雍に至るまで、離宮 三百、鐘鼓・帷帳、移さざるも具ふ。)」とあり、顔師古注は「凡言離宮者、皆謂於別処置之、非常所居也。(凡そ離宮と言ふは、皆な別処に於いて之れを置き、常の居る所に非ざるを謂ふなり。)」という。宋・王僧達「和琅邪王依古」詩『《文選》卷三十一』に「久没離宮地、安識寿陵園(久しく没す 離宮の地、安くんぞ識らん 寿陵園)」と見える。「煙霧」もややかすみ。鮑照「吳興黃浦亭庾中郎別」詩に「連山眇煙霧、長波迴難依(連山 煙霧に眇として、長波 迴かにして依り難し)」と。

7 日落歌吹回 8 塵飛車馬度

「日落」太陽が沈む。謝靈運「七里瀨」詩『《文選》卷二十六』に「石淺水潺湲、日落山照曜(石 浅くして水 潺湲たり、日 落ちて 山 照曜す)」と。「歌吹回」賑やかな歌声と管楽器の音が外出先から帰って来る。「歌吹」、謝朓「同謝諮議銅雀台」詩『《文選》卷二十三』に「鬱鬱西陵樹、詎聞歌吹声(鬱鬱たり西陵の樹、詎ぞ歌吹の声を聞かん)」と見える。「回」、ここは元の場所に戻る。鮑照「代陳思王京洛篇」(『玉台』卷四作「代京雒篇」)に「春吹回白日、霜歌落塞鴻(春吹 白日を回らせ、霜歌 落塞鴻を落とす)」

として描かれる。

5 合殿生光彩 6 離宮起煙霧

「合殿」多く集まった宮殿。杜甫「紫宸殿退朝口号」詩に「香飄合殿春風轉、花覆千官淑景移(香は合殿に飄りて 春風 転じ、花は千官を覆ひて 淑景 移る)」とあり、趙次公注に「宋有合殿之名。(宋に合殿の名有り。)」とあるのは『宋書』良吏伝に「孝武末年、清暑方構、高祖受命、無所改作、所居唯称西殿、不制嘉名。太祖因之、亦有合殿之称。(孝武の末年、清暑 方に構へ、高祖 命を受くるも、改作する所無く、居る所唯だ西殿と称するのみにして、嘉名を制せず。太祖之れに因り、亦た合殿の称有り。)」と見えるのを指すのだろう。杜甫の詩では紫宸殿を指すようだが、ここは「離宮」と対であるから、長安城内で天子が居住する宮殿を指すだろう。

「光彩」色鮮やかな輝き。「光采」とも。魏文帝曹丕「芙蓉池作」詩『《文選》卷二十二』に「上天垂光采、五色一何鮮(上天 光采を垂れ、五色 一に何ぞ鮮やかなる)」とあり、梁武帝蕭衍「天安寺疏圃堂」詩に「參差照光彩、左右皆春色(參差として光彩を照らし、左右 皆な春色なり)」と見える。

「離宮」都城外の宮殿。司馬相如「上林賦」に「於是乎離宮・別館、彌山跨谷。(是に於いてか 離宮・別館、山を彌り谷を跨ぐ。)」とあり、右にも引いた『漢書』

とある。

「塵飛」土埃が舞い上がる。梁簡文帝「行幸甘泉宮」に「鼓声恒入地、塵飛上暗空(鼓声 恒に地に入り、塵 飛 上りて空を暗ふ)」と。

陳・後主叔宝「長安道」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|-----|---------|
| 1 建章通未央 | 建章 | 未央に通じ |
| 2 長樂属明光 | 長樂 | 明光に属く |
| 3 大道移甲第 | 大道 | 甲第を移し |
| 4 甲第玉為堂 | 甲第 | 玉もて堂を為る |
| 5 遊蕩新豐裏 | 遊蕩す | 新豐の裏 |
| 6 戲馬渭橋傍 | 戲馬す | 渭橋の傍ら |
| 7 当壚晚留客 | 当壚 | 晩に客を留め |
| 8 夜夜苦紅妝 | 夜夜 | 紅妝を苦しむ |

【日本語訳】

- 1 建章宮は未央宮に通じていて
- 2 長樂宮は明光宮へと続いている
- 3 大通りに権貴のお屋敷を移築したが
- 4 そのお屋敷は玉で作られている
- 5 新豐でふらふらと遊び回り
- 6 渭橋の側で馬を走らせて遊び楽しむ
- 7 日暮れ時になると酒場で店番の女性が客を引き留めるので

8夜ごと夜ごとに家できれいにお化粧をして夫の帰りを待つ女性を苦しめるのだ

【校勘】

○『古詩紀』卷百八。
異同無し

【押韻】

「光」「堂」「傍」、下平十一唐韻。「妝」、下平十陽韻。
唐・陽同用。

【作者】

五五三〇六〇四。字は元秀、吳興長城（浙江省湖州市）の人。陳の宣帝頊の長子。太建十四（五八二）年、即位。禎明三（五八九）年、隋の文帝によって国を滅ぼされる。その際、井戸の中に隠れたが、捕らえられてしまう。そのまま長安に送られ、年五十二で客死した。

亡国の君主として後世の評判は非常に悪いが、詩人としては梁簡文帝が提唱した「宮体」を継承し、艶麗な作が多い。今日、九十首あまりの詩篇が伝わっており、その大半が楽府である。

【語釈】

1 建章通未央 2 長樂属明光

「建章」漢代の宮殿の名。武帝の時に建てられた。漢長

える。

「長樂」梁簡文帝「長安道」第3句「金槌抵長樂」の【語釈】参照。

「明光」漢代の宮殿の名。長樂宮の北側に位置した。右に引いた班固「西都賦」に「自未央而連桂宮、北彌明光而互長樂。（未央よりして桂宮に連なり、北のかた明光を彌りて長樂に互る。）」とあった。『三輔黄図』卷三「北宮」に「明光宮、武帝太初四年秋起、在長樂宮後、南与長樂宮相聯属。（明光宮、武帝の太初四年秋に起ち、長樂宮の後に在り、南は長樂宮と相ひ聯属す。）」とある。

3 大道移甲第 4 甲第玉為堂

「大道」大通り。この語は沈約、梁簡文帝、梁元帝の「洛陽道」にそれぞれ「洛陽大道中、佳麗實無比」「洛陽佳麗所、大道滿春光」「洛陽開大道。城北達城西」とあった。また、沈炯「長安少年行」には「去来新市側、遨遊大道辺（去来す 新市の側ら、遨遊す 大道の辺）」と見える。

「甲第」身分の高い人のお屋敷。『史記』孝武本紀に「賜列侯甲第、僮千人。（列侯に甲第、僮千人を賜ふ。）」とあり、『集解』が引く『漢書音義』に「有甲乙第次、故曰第。（甲乙の第次有り、故に第と曰ふ。）」とある。また、張衡「西京賦」に「北闕甲第、当道直啓。（北闕の甲第、道に当たりて直ちに啓く。）」とあり、薛綜注

安城の西側のすぐ外にあった。『漢書』郊祀志下に「上還、以柏梁災故、受計甘泉。公孫卿曰、『黃帝就青臺台、十二日燒、黃帝乃治明庭。明庭、甘泉也』。方士多言古帝王有都甘泉者。其後天子又朝諸侯甘泉、甘泉作諸侯邸。勇之乃曰、『粵俗有火災、復起屋、必以大、用勝服之』。於是作建章宮、度為千門万户。（上 還り、柏梁の災ひの故を以て、計を甘泉に受く。公孫卿 曰く、『黃帝 青臺台を就すも、十二日にして焼け、黃帝乃ち明庭に治む。明庭は、甘泉なり』と。方士 多く古への帝王の甘泉に都する者有るを言ふ。其の後 天子 又た諸侯を甘泉に朝せしめ、甘泉に諸侯の邸を作る。勇之 乃ち曰く、『粵の俗 火災有れば、復た屋を起つるに、必ず大なるを以てし、用て之れを勝服す』と。是に於いて建章宮を作り、度るに千門万户為り。）」とあり、陳・沈炯「長安少年行」に「建章通北闕、複道度南宮（建章 北闕に通じ、複道 南宮も度る）」と見える。

「未央」漢代の宮殿の名。漢長安城の西南隅に位置し、建章宮とは城壁を隔てて隣り合っていた。『史記』高祖本紀に「八年、…蕭丞相營作未央宮、立東闕・北闕・前殿・武庫・太倉。（八年、…蕭丞相 未央宮を營作し、東闕・北闕・前殿・武庫・太倉を立つ。）」と見える。「八年」、『漢書』高帝紀下では七年二月のこととする。梁・沈約「甌庭柳」詩に「輕陰弘建章、夾道連未央（輕陰 建章を弘ひ、夾道 未央に連なる）」と見

は「第、館也。甲、言第一也。（第、館なり。甲、第一なるを言ふなり。）」とする。詩では陸機「君子有所思行」『文選』卷二十八に「甲第崇高闐、洞房結阿閤（甲第 高闐を崇くし、洞房 阿閤を結ぶ）」と。

「玉為堂」玉で飾った宮殿。「堂」は「殿堂」、宮殿の意。曹操「氣出倡」三首其三に「乃到王母台、金階玉為堂、芝草生殿傍（乃ち王母の台に到れば、金階 玉もて堂と為し、芝草 殿の傍らに生ず）」とあるのは神仙の住居の意で用いる。陳後主「洛陽道」五首其四に「百尺瞰金埒、九衢通玉堂（百尺 金埒を瞰、九衢 玉堂に通ず）」と「玉堂」の語が見えた。

5 遊蕩新豐裏 6 戲馬渭橋傍

「遊蕩」落ち着き無くふらふらと遊び回る。「遊蕩」とも。『詩經』陳風・宛丘の序に「宛丘」、刺幽公也。淫荒昏乱、游蕩無度焉。（『宛丘』、幽公を刺るなり。淫荒昏乱、游蕩して度無し。）と見える。また、漢・無名氏「東光」に「諸軍遊蕩子、早行多悲傷（諸軍 遊蕩の子、早行に悲傷多し）」と。

「戲馬」馬を走らせて遊び楽しむ。『宋書』傅弘之伝に「弘之素善騎乘、高祖至長安、弘之於姚泓馳道内、緩服戲馬、或馳或驟、往反二十里中、甚有姿制。羌胡聚觀者數千人、並驚惋歎息。（弘之 素り騎乘を善くし、高祖 長安に至るに、弘之 姚泓の馳道の内に於いて、緩服して戲馬し、或いは馳せ或いは驟せて、往反二十里

の中、甚だ姿制有り。羌胡の聚まり観る者 数千人、並びに驚惋歎息す。」とあり、梁・劉孝威「蜀道難に「戯馬吞珠界、揚舠濯錦流（戯馬す 吞珠の界、揚舠す 濯錦の流）」と見える。

〔渭橋〕渭水に架けられた橋。中渭橋・東渭橋・西渭橋の三橋があった。中渭橋は『史記』孝文本紀に「昌至渭橋、丞相以下皆迎。（昌 渭橋に至り、丞相以下 皆な迎ふ。）」とあり、『集解』が引く『三輔故事』に「咸陽宮在渭北、興樂宮在渭南、秦昭王通兩宮之間、作渭橋、長三百八十步。（咸陽宮 渭北に在り、興樂宮 渭南に在り、秦の昭王 兩宮の間を通ぜしめ、渭橋を作り、長さ 三百八十歩。）」とあつて秦の昭王が作ったとする。この橋はまた「横橋」ともいい、『三輔黄圖』卷一「咸陽故城」に「始皇窮極奢侈、築咸陽宮、因北陵宮殿、端門四達、以則紫宮、象帝居。渭水貫都、以象天漢。横橋南度、以法牽牛。（始皇 奢侈を窮極し、咸陽宮を築き、北陵に因りて殿を営み、端門 四達し、以て紫宮に則り、帝居に象る。渭水 都を貫きて、以て天漢に象る。横橋 南度して、以て牽牛に法る。）」とあり、始皇帝が作ったとする。東渭橋は漢の景帝が作った。『史記』孝景本紀に「五年三月作陽陵渭橋。（五年三月 陽陵の渭橋を作る。）」と見えるのがそれである。西渭橋は「便橋」「便門橋」ともいい、建元三年に作られた。『漢書』武帝紀に「（建元）三年、…作便門橋。」とあり、顔師古注に「便門、長安城北面西頭門、

即平門也。古者平便皆同字。於此道作橋、跨渡渭水以趨茂陵、其道易直、即今所謂便橋是其処也。（便門は、長安城の北面の西頭門、即ち平門なり。古へは 平・便 皆な同字なり。此の道に於いて橋を作り、跨ぎて渭水を渡りて以て茂陵に趨き、其の道 易直にして、即ち今の所謂便橋は是れ其の処なり。）」とあるのがそれである。陳・顧野王「長安道」にも「渭橋縦観罷、安能訪狹斜」とあり、徐陵「長安道」には「横橋象天漢、法駕応坤図」と「横橋」の名が見える。

7 当壚晚留客 8 夜夜苦紅粧

〔当壚〕美しい女性が飲み屋の店番をする。またその女性。『史記』司馬相如列伝に「相如与俱之臨邛、尽売其車騎、買一酒舍酤酒、而令文君当鑪。相如身自著犢鼻褌、与保庸雜作、滌器於市中。（相如 与に俱に臨邛に之き、尽く其の車騎を売り、一酒舍を買ひて酒を酤り、而して文君をして鑪に当たらしむ。相如 身に自ら犢鼻褌を著け、保庸と雜作し、器を市中に滌ふ。）」と見える故事に拠る。「鑪」は酒甕を置く壇、「壚」に通じる。

〔留客〕人を引き留めて帰るのを忘れさせる。『楚辞』大招に「長袂払面、善留客只（長袂 面を払ひ、善く客を留む）」とあり、王逸注に「言美女工舞、揄其長袖、周旋屈折、払拭人面、芬香流衍、衆客喜樂、留不能去也。（美女の舞ひを工みにし、其の長袖を揄るひ、周旋

屈折して、人面を払拭し、芬香 流行して、衆客 喜

樂して、留まりて去る能はざるを言ふなり。）」という。陳・岑之敬「洛陽道」に「復有能留客、莫愁嬌態新（復た能く客を留むる有り、莫愁 嬌態 新たなり）」とあつた。同じく岑之敬「烏棲曲」には「明月二八照花新、当壚十五晚留賓（明月 二八 花の新たなるを照らし、当壚 十五 晩に賓を留む）」とある。

〔夜夜〕夜ごと夜ごとに。梁簡文帝「長安道」にも「金張及許史、夜夜尚留賓（金・張 及び許・史、夜夜 尚ほ賓を留む）」と類似句があつた。

〔紅粧〕女性の美しい化粧。また化粧を施した美しい女性。「紅粧」とも。謝朓「和王主簿怨情」詩（『文選』卷三十。『玉台』卷四）「徒使春帶餘、坐惜紅粧變（徒に春帯をして餘からしめ、坐しく紅粧の變ずるを惜しむ）」と。

陳・顧野王「長安道」

【本文及び書き下し】

- 1 鳳樓臨広路 鳳樓 広路に臨み
- 2 仙掌入煙霞 仙掌 煙霞に入る
- 3 章台京兆馬 章台 京兆の馬
- 4 逸陌富平車 逸陌 富平の車
- 5 東門疏広錢 東門 疏広の錢
- 6 北闕董賢家 北闕 董賢の家
- 7 渭橋縦観罷 渭橋に縦を縦にし罷はれば

8 安能訪狹斜 安んぞ能く狹斜を訪はん

【日本語訳】

- 1 美しい女性が住まう樓閣が大通りに面して建ち
- 2 甘露を承ける盤を捧げ持った仙人の掌が雲にまで届く
- 3 章台街では京兆尹の馬が走り抜け
- 4 もの静かな道では富平侯の車が進む
- 5 東都門では帰郷する疏広のために送別の人々が集い
- 6 北闕には哀帝に寵愛された董賢のお屋敷が建っている
- 7 渭橋で心ゆくまで見物し終えたけれども
- 8 妓楼のある裏通りを訪ねる余裕はなさそうだ

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷百十六。

異同無し

【押韻】

〔霞〕「車」「家」「斜」、下平九麻韻。

【作者】五一九〇五八一。梁・陳の文字学者、作家、画家。字は希馮。吳郡吳（江蘇省蘇州市）の人。王褒とともに梁の宣城王蕭大器の賓客となった時、王のために古賢の像を描き、褒も贊を作つて「二絶」と称された。また、簡文帝蕭綱の命を受け『玉篇』を撰した。梁が滅びると陳に仕え、黄門侍郎、光祿卿などを歴任した。現在、

詩十首を伝えるが、大半が樂府である。

【語釈】

1 鳳樓臨広路 2 仙掌入煙霞

〔鳳樓〕美しい女性がいる樓閣。鮑照「代陳思王京洛篇」〔玉台〕卷四作「代京雒篇」。に「鳳樓十二重、四戸八綺窓（鳳樓 十二重、四戸 八綺窓）」とあるのは、『太平御覽』卷百七十六に引く『晋宮閣名』に「洛陽有鳳皇樓。」と見える「鳳皇樓」のことかもしれないが、梁簡文帝「艷歌篇」〔玉台〕卷七の「凌晨光景麗、倡女鳳樓中（凌晨 光景 麗らかに、倡女 鳳樓の中）」、同じく「和湘東王名士悅傾城」詩〔玉台〕卷七の「多遊淇水上、好在鳳樓中（多く遊ぶ 淇水び上、好在 鳳樓の中）」からすると、歌舞に優れた女性が住まう樓閣のようである。

〔広路〕庾肩吾「長安道」「黃山開広路」【語釈】参照。〔仙掌〕不老不死を求めた漢の武帝が建章宮に造った仙人の銅像の甘露を承ける盤を捧げ持った掌。班固「西都賦」に「抗仙掌以承露、擢双立之金茎。（仙掌を抗げて以て露を承け、双立の金茎を擢く。）」とあり、李善注は『漢書』郊祀志上に「其後又作柏梁・銅柱・承露仙人掌之属矣。（其の後 又た柏梁・銅柱・承露仙人掌の属を作る。）」とあるのを引く。

〔煙霞〕雲や霧。謝朓「擬宋玉風賦」に「煙霞潤色、荃蕙結芳。（煙霞 潤色し、荃蕙 芳を結ぶ。）」と見え

るが、ここは潘岳「西征賦」（『文選』卷十）に「擢仙掌以承露、干雲漢而上至。（仙掌を擢きんでて以て露を承け、雲漢を干して上り至る。）」とあるのを意識するだろう。」

3 章台京兆馬 4 逸陌富平車

〔章台京兆馬〕京兆尹の馬が章台街を走り抜ける。『漢書』張敞伝に「敞為京兆、朝廷每有大議、引古今、処便宜、公卿皆服、天子数従之。然敞無威儀、時罷朝会、過走馬章台街、使御史驅、自以便面拊馬。（敞 京兆と為り、朝廷に大議有る毎に、古今を引き、便宜を処せば、公卿 皆な服し、天子 数しば之れに従ふ。然れども敞 威儀無く、時に朝会を罷へ、過りて馬を章台街に走らすに、御史をして驅けしめ、自ら便面を以て馬を拊つ。）」とある故事に拠る。〔章台〕は長安の街路の名。張敞伝の顔師古注に「孟康曰、『在長安中』。臣瓚曰、『在章台下街也』。（孟康 曰く、『長安中に在り』と。臣瓚 曰く、『章台の下に在るの街なり』。）」とある。北周・庾信「和宇文京兆遊田」詩に「懸知画眉罷、走馬向章台（懸知す 眉を画き罷へ、馬を走らせて章台に向かふ）」とあるのも同じ故事を用いる。陳・阮卓「長安道」にも「殘雲銷鳳闕、宿霧斂章台（殘雲鳳闕に銷え、宿霧 章台に斂まる）」と見える。

〔逸陌〕ひっそりと静かな道。沈約「郊居賦」（『梁書』沈約伝）に「傍逸陌之修平、面淮流之清直。（逸陌の修

平なるに傍ひ、淮流の清直なるに面す。）」とあり、梁・張纘「謝東宮賁園啓」にも「前逼逸陌、朝夕爽塏。後望鍾阜、表裏煙霞。（前は逸陌に逼り、朝夕 爽塏なり。後は鍾阜を望み、表裏 煙霞あり。）」と見える。〔富平車〕富貴の人が乗る車。〔富平〕は富平侯、張安世を指す。『漢書』昭帝紀に「右將軍張安世宿衛忠謹、封富平侯。（右將軍張安世 宿衛 忠謹、富平侯に封ず。）」とある。張安世の名は梁簡文帝「長安道」に「金張及許史、夜夜尚留賓（金・張 及び許・史、夜夜 尚ほ賓を留む）」と見えた。

5 東門疏広錢 6 北闕董賢家

〔東門疏広錢〕長安の東都門で疏広の帰郷を盛大に見送った。『漢書』疏広伝に「疏広字仲翁、東海蘭陵人也。

少好学、明『春秋』、家居教授、学者自遠方至。（疏広 字は仲翁、東海蘭陵の人なり。少くして学を好み、『春秋』に明らかにして、家居して教授し、学者遠方より至る。）。やがて都に召されて兄の子である受とともに皇太子の教育に携わるが、五年後、「広謂受曰、『…今仕官至二千石、宣成名立、如此不去、懼有後悔。…』（広謂受曰、『…今 仕官して二千石に至り、宣は成り名は立ち、此くの如くして去らざれば、有後悔有るを懼る。…』）」として、「広遂称篤、上疏乞骸骨。上以其年篤老、皆許之、加賜黃金二十斤、皇太子贈以五十斤。公卿大夫故人邑子設祖道、供張東都

門外、送者車数百両、辞決而去。及道路觀者皆曰、『賢哉二大夫』。或歎息為之下泣。（広 遂に篤きを称し、上疏して骸骨を乞ふ。上 其の年の篤老なるを以て、皆な之れを許し、加へて黄金二十斤を賜ひ、皇太子贈るに五十斤を以てす。公卿大夫故人邑子 祖道を設け、張を東都門外に供へ、送る者 車 数百両、辞決して去る。及び道路の觀る者 皆な曰く、『賢なるかな二大夫』と。或いは歎息して之れが為に泣を下す。）」とある故事に拠る。〔東門〕は「東都門」、宣平門の別名。顔師古注に「蘇林曰、『長安東郭門也』。」とあり、『三輔黃圖』卷一「都城十二門」に「長安城東出北頭第一門曰宣平門、民間所謂東都門。（長安城の東 北頭に出づるの第一門を宣平門と曰ひ、民間の所謂東都門なり。）」と。

〔北闕董賢家〕北側の宮殿には董賢の豪奢な家が聳える。『漢書』佞幸伝・董賢に「董賢字聖卿、雲陽人也。父恭、為御史、任賢為太子舍人。哀帝立、賢隨太子官為郎。二歳余、賢伝漏在殿下、為人美麗自喜、哀帝望見、説其儀貌、識而問之、曰、『是舍人董賢邪』。因引上与語、拜為黃門郎、繇是始幸。…詔將作大匠為賢起大第北闕下、重殿洞門、木土之功窮極技巧、柱檻衣以綈錦。（董賢 字は聖卿、雲陽の人なり。父 恭、御史と為り、賢を任じて太子舍人と為す。哀帝 立ち、賢 太子の官に随ひて郎と為る。二歳余、賢 漏を伝へて殿下に在り、人と為り 美麗にして自ら喜び、哀帝

望見して、其の儀貌を説び、識りて之れに問ふて、曰く、『是れ舍人の董賢なるか』と。因りて上に引きて与に語り、拝して黄門郎と為し、是れより始めて幸す。将作大匠に詔して賢の為に大第を北闕の下に起こさしめ、殿を重ね門を洞ね、木土の功 技巧を窮極し、柱檻 衣ふに絺錦を以てす。」と見える故事に拠る。「北闕」は『漢書』高帝紀下に「蕭何治未央宮、立東闕・北闕・前殿・武庫・太倉。(蕭何 未央宮を治め、東闕・北闕・前殿・武庫・太倉を立つ。)」とあり、その顔師古注に「未央宮 南に向くと雖も、而も上書・奏事・謁見の徒 皆な北闕に詣る。」という。

7 渭橋縦観罷 8 安能訪狭斜

「縦観」心ゆくまで見物する。『史記』高祖本紀に「高祖常繇咸陽、縦観、觀秦皇帝、喟然太息曰、『嗟乎、大丈夫当如此也』。(高祖 常て咸陽に繇し、觀を縦にし、秦の皇帝を觀て、喟然として太息して曰く、『嗟乎、大丈夫 当に此くの如くなるべきなり』と。)」とある。「狭斜」狭い裏通り。樂府古辭に「長安有狭斜行」があり、以降この樂府題でしばしば遊侠の少年や妓楼を描く。陳・蕭賁「長安道」には「經過狭斜裏、日暮与淹留(經過す 狭斜の裏、日暮 与に淹留す)」とあり、隋・何妥「長安道」にも「長安狭斜路、縦横四達分(長安 狭斜の路、縦横 四達 分かる)」とある。

2 「鳴」、『英華』作「鼓」、而注云「一作『鳴』」。

【押韻】

「開」「台」「来」、上平十六吟韻。「回」、上平十五灰韻。灰・吟同用。

【作者】

五三―五八九。幼くして聡明で、經書をよく読み、談論が巧みで、五言詩を得意とした。陳の文帝が即位すると、輕車鄱陽王府外兵參軍に任じられた。太建九(五七七)年、始興王陳叔陵が揚州刺史となると、その中衛府記室參軍となつた。太建十四年、始興王陳叔陵が反乱を起こして敗死したが、陳の後主は阮卓の罪を問わなかった。至德三(五八五)年、隋への使節に副使として参加した際、隋の文帝は阮卓を礼遇し、薛道衡や顔之推らとともに宴席で詩を賦させた。帰国後は眼疾によつて隠退し、酒と文章を楽しむ生活を送っていたが、禎明三(五八九)年、陳が隋に滅ぼされると関中に赴こうとしたが、途中江州で卒した。現存する詩は六首のみ。『陳書』に本伝がある。

【語釈】

1 長安馳道上 2 鍾鳴宮寺開

「馳道」天子の車を通る道。『礼記』曲礼下に「歳凶、年穀不登、君膳不祭肺、馬不食穀、馳道不除、祭事不果。

陳・阮卓「長安道」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|--------------|
| 1 長安馳道上 | 長安 馳道の土 |
| 2 鍾鳴宮寺開 | 鍾 鳴りて 宮寺 開く |
| 3 残雲銷鳳闕 | 残雲 鳳闕に銷え |
| 4 宿霧斂章台 | 宿霧 章台に斂まる |
| 5 騎轉金吾度 | 騎 轉じて 金吾 度り |
| 6 車鳴丞相來 | 車 鳴りて 丞相 來たる |
| 7 藹藹東都晚 | 藹藹たる東都の晩 |
| 8 群公駟御回 | 群公の駟御 回る |

【日本語訳】

- 1 長安の天子が通る道の側では
- 2 朝を告げる鐘が鳴ってお役所が開く
- 3 散り散りになった雲が鳳闕に消えてゆく
- 4 昨夜来の霧が章台に戻っていく
- 5 通りの馬が向きを変えたのは向こうから執金吾がやって来たのを憚って
- 6 車の音が響いたかと思うと丞相さまがお出でになった
- 7 車馬が賑やかに行き交う東都門の夕暮れ
- 8 疏広と疏受の帰郷を見送った後、お偉いさんたちの車が帰っていく

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷百十六。

(歳 凶にして、年穀 登らざれば、君 膳に肺を祭らず、馬 穀を食はず、馳道 除はず、祭事 果せず。)とあり、孔穎達疏に「馳道、正道。如今之御路也。是君馳走車馬之处、故曰馳道也。(馳道、正道なり。今の御路の如きなり。是れ君の車馬を馳走するの处、故に馳道と曰ふなり。)」という。また、鮑照「代君子有所思」(『文選』卷三十一。『鮑氏集』作「代陸平原君有所思行」)に「層閣肅天居、馳道直如髮(層閣 肅として天居のごとく、馳道 直きこと髪の毛の如し)」とあって、李善注は『漢書』成帝紀に「上嘗急召、太子出龍樓門、不敢絶馳道。(上 嘗て急に召すに、太子 龍樓門を出で、敢へて馳道を絶たず。)」とあり、顔師古注が引く応劭の説に「馳道、天子所行道也、若今之中道。(馳道、天子の行く所の道なり、今の中道の若し。)」とあるのを引く。北周・王褒「長安道」にも「槐衢回北第、馳道度西宮(槐衢 北第を回り、馳道 西宮に度る)」とある。また、陳後主、徐陵の「洛陽道」にも「青槐夾馳道、御水映銅溝(青槐 馳道を夾み、御水 銅溝に映ず)」(「洛陽馳道上、春日起塵埃(洛陽 馳道の上、春日 塵埃起こる)」とあった。

「鍾鳴」一日の始まりと終わりを告げる鐘が鳴る。鮑照「放歌行」(『文選』卷二十八)「日中安能止、鍾鳴猶未帰(日中 安くんぞ能く止まんや、鍾 鳴るも 猶ほ未だ帰らず)」とあり、李善注は漢・崔寔『正論』を引いて「永寧詔曰、『鍾 鳴り 漏 尽くれば、洛陽城

中行く者有るを得ず』とする。鮑照の「鍾鳴」は洛陽の日暮れを告げる鐘だが、ここは詩意から夜明けを告げる鐘と解した。王褒「長安道」にも「喧喧許史座、鍾鳴賓未窮（喧喧許史座、鍾鳴賓未窮）」とある。「宮寺」皇宮と役所。六朝詩には他の用例は見当たらないが、『晋書』卞壺伝に「賊放火烧宮寺、六軍敗績。（賊火を放ちて宮寺を焼き、六軍 敗績す。）」と見える。

3 残雲銷鳳闕 4 宿霧斂章台

「残雲」散り散りになって薄くなった雲。後の例になるが隋煬帝楊広「悲秋」詩に「断霧時通日、残雲尚作雷（断霧 時に日を通し、残雲 尚ほ雷を作す）」と。

「鳳闕」建章宮の東にあつた宮殿。上に銅の鳳凰があつた。班固「西都賦」に「設壁門之鳳闕、上觚稜而棲金爵。（壁門の鳳闕を設け、上は觚稜して金爵を棲ましむ。）」とあり、李善注は『漢書』郊祀志下に「於是作建章宮、度為千門万户。前殿度高未央。其東則鳳闕、高二十余丈。（是に於いて建章宮を作り、度 千門万户と為す。前殿 度高未央より高し。其の東は則ち鳳闕、高さ二十余丈。）」とあるのを引き、その顔師古注は「三輔故事」云「其闕園上有銅鳳凰。」「三輔故事」に「其の闕園上に銅の鳳凰有り」と云ふ。」とする。

「宿霧」朝になつてもまだ消え残る夜霧。晋・陶淵明「詠貧士」詩（『文選』卷三十）に「朝霞開宿霧、衆鳥相与飛（朝霞 宿霧を開き、衆鳥 相ひ与に飛ぶ）」と。

5 騎金吾度 6 車鳴丞相来

「騎転」馬が向きを変える。庾肩吾「九日侍宴樂遊苑応令」詩に「鉤陳万騎転、閭闔九関通（鉤陳 万騎 転じ、閭闔 九関 通ず）」と。

「金吾」天子を護衛し、都の治安を掌る。『漢書』百官公卿表上に「中尉、秦官、掌徼循京師、有兩丞・侯・司馬・千人。武帝太初元年更名『執金吾』。（中尉、秦の官、京師を徼循するを掌り、兩丞・侯・司馬・千人有り。武帝の太初元年 名を『執金吾』に更む。）」とあり、顔師古注は「応劭曰、『吾者、禦也。掌執金革以禦非常』。師古曰、『金吾、鳥名也。主辟不祥。天子出行、職主先導、以禦非常。故執此鳥之象、因以名官』。（応劭 曰く、『吾は、禦なり。金革を執りて以て非常を禦ぐを掌る』と。師古 曰く、『金吾、鳥の名なり。不祥を辟くるを 主る。天子 出行するや、職として先導するを主りて、以て非常を禦ぐ。故に此の鳥の象を執り、因りて以て官に名づく』と。）とする。また、晋・崔豹『古今注』に「車輻棒也。漢朝『執金吾』『金吾』亦棒也。以銅為之、黄金塗両末、謂為『金吾』。（車輻、棒なり。漢朝の『執金吾』『金吾』も亦た棒なり。銅を以て之れを為り、黄金もて両末を塗り、謂ひて『金吾』と為す。）」という。『後漢書』皇后紀上に「光烈陰皇后諱麗華、南陽新野人。初、光武適新野、聞后美、心悅之。後至長安、見執金吾車騎甚盛、因歎曰、『仕宦

当作執金吾、娶妻当得陰麗華』。（光烈陰皇后 諱は麗華、南陽新野の人。初め、光武 新野に適き、后の美しきを聞き、心に之れを悦ぶ。後に長安に至り、執金吾の車騎の甚だ盛んなるを見て、因りて歎じて曰く、『仕宦しては当に執金吾と作るべく、妻を娶っては当に陰麗華を得べし』と。）」とあり、執金吾は若者の憧れだった。徐陵「長安道」にも「喧喧擁車騎、非但執金吾（喧喧として車騎を擁ぐは、但だ執金吾のみに非ず。）」と見える。漢・辛延年「羽林郎」詩（『玉台』卷一）に「不意金吾子、娉婷过我廬（意はざりき 金吾の子、娉婷として我が廬に過る）」と。

「丞相」天子を輔佐する最高の官。梁・蕭子顯「燕歌行」（『玉台』卷九）に「洛陽城頭鷄欲曙、丞相府中鳥未飛（洛陽城頭 鷄 曙けんと欲し、丞相府中 鳥 未だ飛ばず）」とある。

7 藹藹東都晚 8 群公騁御回

「藹藹」二句、晋・張協「詠史」詩（『文選』卷二十一）の「藹藹東都門、群公祖三疏（藹藹たる東都の門、群公 三疏い祖す）」を踏まえる。「三疏」は顧野王「長安道」の「東門疏広餞」に見えた疏広と兄の子である疏受のこと。「藹藹」は盛んで多い様。左思「詠史」詩八首（『文選』卷二十一）其五に「寢寢高門内、藹藹皆王侯（寢寢たる高門の内、藹藹として皆な王侯なり）」とあり、李善注は『詩経』大雅・卷阿に「藹藹王多吉

士（藹藹として 王 吉士多し）」とあるのを引き、『広雅』釈訓に「藹藹、盛也。」とあるのを引く。

「東都」ここは上にもあつた東都門をいう。顧野王「長安道」「東門疏広餞」【語釈】参照。

「群公」著名人たち。宋・袁淑「效曹子建白馬篇」（『文選』卷三十一）に「五侯競書幣、群公亟為言（五侯競ひて書幣し、群公 亟しば為に言ふ）」と。

「騁御」御者。六朝詩にはあまり見当たらない語だが、何遜「早朝車中聽望」詩に「胥徒紛絡繹、騁御各西東（胥徒 紛として絡繹し、騁御 各おの西東す）」とある。

陳・蕭賁「長安道」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|-------------|
| 1 前登灞陵道 | 前みて登る 灞陵の道 |
| 2 還瞻渭水流 | 還りて瞻る 渭水の流れ |
| 3 城形類北斗 | 城は 形 北斗に類し |
| 4 橋勢似牽牛 | 橋は 勢ひ 牽牛に似る |
| 5 飛軒駕良駟 | 飛軒 良駟を駕け |
| 6 宝剑雜輕裘 | 宝剑 輕裘を雜ふ |
| 7 經過狹斜裏 | 經過す 狹斜の裏 |
| 8 日暮与淹留 | 日 暮れて 与に淹留す |

【日本語訳】

- 1 歩みを進めて灞陵への道を登っていき

2 渭水の流れを振り返って眺めてみた
3 長安城はその形が北斗七星に似て
4 中渭橋はその姿が牽牛星に似ている
5 道には快速の車が四頭の駿馬をつないで走り
6 立派な剣を佩いた若者が高級な皮衣の着た人々の間に
入り混じって歩いていく
7 昔、裏通りに立ち寄った時
8 ちようど夕暮れ時だったので、友人たちといっしょに
その妓楼に居続けたものだ

【校勘】

○『芸文類聚』卷四十二。『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷百十六。

- 0、『類聚』作「梁元帝『長安路詩』」。
1「道」、『類聚』『英華』並作「岸」。
3「北」、『類聚』作「南」。
5「駕」、『類聚』作「与」。
7「裏」、『英華』『詩紀』作「里」、而注云「一作『裏』」。
8「与」、『類聚』作「且」。『英華』作「興」、注云「一作『与』、又作『且』」。『詩紀』注云「一作『且』」。

【押韻】

「流」「牛」「裘」「留」、下平十八尤韻。

【作者】？五四九。字は文奐。梁の文人。齊の竟陵王

と疑ふ」と。

「渭水」長安の北を東流する川。瀾陵は渭水の支流である瀾水のほとりにあり、渭水はやがて黄河に合流する。

3 城形類北斗 4 橋勢似牽牛

「城形類北斗」漢長安城の形状が北斗七星に似ている。『三輔黄図』卷一「漢長安故城」に「城南為南斗形、北為北斗形、至今人呼漢京城為斗城是也。（城南 南斗の形を為し、北 北斗の形を為し、今人 漢の京城を呼びて斗城と為すに至るは是れなり。）とある。

「橋勢似牽牛」渭水に架かる中渭橋の形は牽牛星をかたどっている。陳後主「長安道」の第6句「戲馬渭橋傍」

【語釈】参照。

5 飛軒駕良駟 6 宝剑雜輕裘

「飛軒」小さくて速い車。曹植「七啓」八首（『文選』卷三十四）其三に「飛軒電逝、獸随輪轉。（飛軒 電のごとく逝き、獸 輪に随ひて転る。）と鏡機子が狩獵の楽しみを述べる中に見え、晋・劉琨「扶風歌」（『文選』卷二十八）に「顧瞻望宮闕、俯仰御飛軒（顧瞻して宮闕を望み、俯仰して飛軒を御す）」と見える。

「良駟」四頭の優れた馬。古くは四頭の馬に車を引かせたことからいう。晋・嵇喜「答嵇康」詩四首其三に「孔父策良駟、不云世路難（孔父 良駟に策うち、世路難しと云はず）」

子良の孫。『南史』卷四十四に本伝がある。梁の湘東王の法曹參軍に起家し、侯景の乱に際して湘東王の怒りを買って獄に下され、そのまま餓死した。『古詩紀』や『先秦漢魏晋南北朝詩』が陳詩に入れるのは「樂府詩集」に拠ったようである。詩はこの「長安道」しか残っていないが、それも『芸文類聚』は梁元帝の作とする。

【語釈】

1 前登瀾陵道 2 還瞻渭水流

「前登」さらに進んでへの道を登る。宋・顔延之「北使洛」詩（『文選』卷二十七）に「前登陽城路、日夕望三川（前みて陽城の路を登り、日夕 三川を望む）」とある。

「瀾陵」漢の文帝の陵墓である瀾陵による地名。西安市の東に位置する。漢長安城から見ると東南に当たる。そのため、班固「西都賦」では「若乃觀其四郊、浮遊近県、則南望杜・霸、北眺五陵。（若し乃ち其の四郊を觀、近県に浮遊すれば、則ち南に杜・霸を望み、北に五陵を眺む。）とされる。二句は王粲「七哀」詩二首（『文選』卷二十三）其一に「南登瀾陵岸、迴首望長安（南のかた瀾陵の岸に登り、首を迴らし長安を望む）」とあるのに基づく。

「還瞻」振り返る。王粲の「迴首」に対応する。梁簡文帝「経琵琶峽」詩に「還瞻已迷向、直去復疑前（還りて瞻れば已に向かふに迷ひ、直ちに去るも復た前むか

「宝剑」立派な剣。曹植「名都篇」（『文選』卷二十七）に「名都多妖女、京洛出少年。宝剑直千金、被服光且鮮（名都 妖女多く、京洛 少年を出だす。宝剑 直千金、被服 光きて且つ鮮やかなり）」とあり、李善注は「史記」陸賈伝に「陸生常安車駟馬、從歌舞琴瑟侍者十人、宝剑直百金。（陸生 常に安車駟馬、歌舞し琴瑟を鼓する侍者十人を從へ、宝剑 直 百金。）」（李善注引、「百」作「千」）とあるのを引く。

「輕裘」軽く暖かい皮衣。曹丕「善哉行」（『文選』卷二十七）に「策我良馬、被我輕裘（我が良馬に策うち、我が輕裘を被る）」とあり、李善注は「詩経」鄘風・干旄に「素糸紕之、良馬四之（素糸 之れを紕し、良馬 之れを四にす）」とあり、『論語』雍也に「赤之適齊也、乘肥馬、衣輕裘。（赤「の齊に適くや、肥馬に乗り、輕裘を衣る。）」とあるのを引く。

7 經過狹斜裏 8 日暮与淹留

「經過」立ち寄る。通り掛かる。阮籍「詠懷」詩八十二首其五（『文選』卷二十三）に「西遊咸陽中、趙李相經過（西のかた咸陽の中に遊び、趙李 相ひ經過す）」を意識すると思う。

「狹斜」顧野王「長安道」第8句「安能訪狹斜」【語釈】参照。

「日暮」夕暮れ。王粲「雜詩」（『文選』卷二十九）に「日暮遊西園、冀写憂思情（日 暮れて 西園に遊び、憂

思の情を写^{のぞ}かんと冀^{ねが}ふ」と。
「淹留」梁元帝「長安道」第8句「淹留重上春」【語釈】
参照。

陳・徐陵「長安道」

【本文及び書き下し】

- 1 輦道乘双闕 輦道 双闕に乗り
- 2 英雄被五都 英雄 五都を被ふ
- 3 横橋象天漢 横橋 天漢に象り
- 4 法駕応坤図 法駕 坤図に応ず
- 5 韓康売良薬 韓康 良薬を売り
- 6 董偃鬻明珠 董偃 明珠を鬻ぐ
- 7 喧喧擁車騎 喧喧として車騎を擁ぐは
- 8 非但執金吾 但だ執金吾のみに非ず

【日本語訳】

- 1 天子の乗る車が往き来する道は左右一対の高い建物の上に乗っていて、途中をさえぎるものなどなく
- 2 豪傑たちが五つの大都会をおおうほどたくさんいる
- 3 横橋が天の川になぞらえられる渭水に架かり
- 4 天子の乗る六頭立ての馬車は大地の姿に似せられている
- 5 長安の路上では韓康が山から採集して来た良薬を売っていたり
- 6 董偃が海で採れた真珠を売っていたりして賑わっている

1 輦道乘双闕 2 英雄被五都
「輦道」天子が乗る車が行き来する宮中の道。『漢書』司馬相如伝上に引く「上林賦」に「華榱壁璫、輦道纏属。（華榱 壁璫にして、輦道 纏属す。）」とあり、顔師古注に「輦道、謂閣道可以乘輦而行者也。（輦道、閣道の以て輦に乗りて行くべき者を謂ふなり。）」という。「双闕」宮門の両脇にあつた左右一対の高い建物。ここは建章宮の東にあつた別風闕と北にあつた円闕というふたつの楼閣。『三輔黄图』卷二「漢宮」に『三輔旧事』云、「建章宮、周回三十里。東起別風闕、高二十五丈、乘高以望遠。又於宮門北起円闕、高二十五丈、上有銅鳳凰、赤眉賊壞之。」（『三輔旧事』に云ふ、『建章宮、周回 三十里。東に別風闕を起て、高さ 二十五丈、高きに乗りて以て遠きを望む。又た宮門の北に於いて円闕を起て、高さ 二十五丈、上に銅の鳳凰有り、赤眉の賊 之れを壊す』と。）とあり、また「古歌云、『長安城西有双闕、上有双銅雀、一鳴五穀生、再鳴五穀熟。按銅雀、即銅鳳凰也。（古歌に云ふ、『長安城西 双闕有り、上に双銅雀有り、一たび鳴けば 五穀生じ、再び鳴けば 五穀 熟す』と。按ずるに銅雀は、即ち銅の鳳凰なり。』」とある。庾肩吾「洛陽道」にも「日起罽罍外、車回双闕前（日は起つ 罽罍の外、車は回る 双闕の前）」とあつた。
「英雄」才知ともにすぐれた人。豪傑。『後漢書』袁術伝に「英雄角逐、分割疆宇。（英雄 角逐し、疆宇を分割

るいる
7にぎやかに往来する車や馬の流れをふさぐのは
8執金吾ばかりではないのだ

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷百十。
異同無し

【押韻】

「都」「図」「吾」、上平十一模韻。「珠」、上平十虞韻。
虞・模同用。

【作者】

五〇七～五八三。梁、陳に仕えた文人。字は孝穆、東海郡郿（山東省）の人。父の徐摛は庾信の父庾肩吾とともに梁の太子蕭綱（後、簡文帝）の文学サロンを代表する文人であり、「宮体詩」の形成に大きな影響を与えた。徐陵も蕭綱に優遇され、その命を受けて『玉台新詠』を編集した。北朝に使いしている間に梁が滅びたが、苦難の末に南帰し、陳に仕え吏部尚書など高官を歴任して政治的にも重きを成した。また文壇の領袖として庾信と名を齊しくし「徐庾体」と称された。『玉台新詠』序など文章でも優れた作品を残している。

【語釈】

す。」とある。ここは班固「西都賦」に「与乎州郡之豪傑、五都之貨殖、三選七遷、充奉陵邑。（州郡の豪傑、五都の貨殖と、三選 七遷して、陵邑に充奉す。）」とあるのを踏まえると思う。六朝詩にはそれほど用例は多くなく、沈炯「長安少年行」に「自言居漢世、少小見豪雄（自ら言ふ 漢の世に居り、少小 豪雄を見る）」と見える。

「五都」五つの大都会。漢代は洛陽・邯鄲・臨淄・宛・成都を指した。右の「西都賦」の李善注は『漢書』食貨志に「遂於長安及五都立五均官、更名長安東西市令及洛陽・邯鄲・臨淄・宛・成都市長皆為五均司市師。（遂に長安 及び五都に於いて五均官を立て、更に長安の東西の市令 及び洛陽・邯鄲・臨淄・宛・成都市長に名づけて皆な五均司市師と為す。）」とあるのを引く。詩では鮑照「擬古詩」八首其五に「伊昔不治業、倦遊觀五都（伊昔 業を治めず、遊に倦みて五都を觀る）」と。

3 横橋象天漢 4 法駕応坤図

「横橋」渭水に架かつていた橋。陳後主「長安道」第6句「戲馬渭橋傍」【語釈】参照。

「象天漢」天の川の姿に似せる。この句には省略があつて、横橋が天の川になぞらえられる渭水に架かっている、というような意味だろうと解した。前にも引いた『三輔黄图』卷一「咸陽故城」に「渭水貫都、以象天

漢。(渭水 都を貫きて、以て天漢に象る。)」とあった。「天漢」は天の川。曹丕「雜詩」二首(『文選』卷二十九)其「一」に「天漢迴西流、三五正從横(天漢 迴りて西に流れ、三五 正に從横たり)」と見える。

【法駕】天子の乗る車。班固「西都賦」に「於是乘鑾輿、備法駕、帥群臣。披飛廉、入苑門。(是に於いて鑾輿に乗り、法駕を備へ、群臣を率ゐ、飛廉を披きて、苑門に入る。)」とあり、李善注は蔡邕「独断」を引いて「天子出、車駕次第、謂之鹵簿、有法駕。(天子の出づるや、車駕の次第、之れを鹵簿と謂ひ、法駕有り。)」という。六朝詩には他の用例は見当たらない。

【応坤図】大地の様になぞらえる。「坤図」の語は他に用例が見当たらないが、「象天漢」と対をなすことから推して、大地の姿くらいの意味だろう。『易』説卦に「坤、地也。」とあり、同じく繫辭伝上に「生生之謂易、成象之謂乾、效法之謂坤。(生生を之れ易と謂ひ、象を成すを之れ乾と謂ひ、法を效すを之れ坤と謂ふ。)」とある。

5 韓康売良薬 6 董偃鬻明珠

【韓康売良薬】『後漢書』逸民伝・韓康に「韓康字伯休、一名恬休、京兆霸陵人。家世著姓、常采薬名山、売於長安市、口不二価、三十余年。(韓康 字は伯休、一に恬休と名づけ、京兆霸陵の人。家世著姓にして、常に薬を名山に採り、長安の市に売るも、口 価を二にせざること、三十余年。)」と見える。

【董偃鬻明珠】『漢書』東方朔伝に「初、帝姑館陶公主号寶太主、堂邑侯陳午尚之。午死、主寡居、年五十余矣、近幸董偃。始偃与母以売珠為事、偃年十三、随母出入主家。(初め、帝の姑 館陶公主 寶太主と号し、堂邑侯陳午 之れを尚る。午 死し、主 寡居して、年五十余、董偃を近幸す。始め偃 母と珠を売って事と為し、偃 年 十三、母に随ひて主の家に出入す。)」と見える。

7 喧喧擁車騎 8 非但執金吾

【喧喧】人の声や物の音がにぎやかで騒がしい。梁・何遜「学古、贈丘永嘉征還」詩に「結客蕙河返、喧喧動四隣(客を結びて蕙河より返り、喧喧として四隣を動かす)」とある。誼誼とも。梁・吳均「戰城南」に「陌上何誼誼、匈奴围塞垣(陌上 何ぞ誼誼たる、匈奴 塞垣を围む)」「(誼誼)、『文苑英華』卷百九十六作「喧喧」)。と。北周・王褒「長安道」にも「喧喧許史座、鐘鳴寶未窮(喧喧たる 許史の座、鐘 鳴なるも 寶未だ窮まらず)」とある。

【擁】ふさぐ。壅塞の意。ここは車や馬の行く手をさえぎると解した。阮卓「長安道」でも執金吾を憚ってか、馬が向きを変える様が描かれていた。

【車騎】車と馬。司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)に、「車騎雷起、殷天動地。(車騎 雷起し、天を殷ひ地を動かす。)」とあり、鮑照「放歌行」(『文選』卷二十

八。『鮑氏集』作「代放歌行」。)に「冠蓋縱横至、車騎四方来(冠蓋 縱横に至り、車騎 四方より来たる)」とある。

【非但】「ただけではない。梁・江淹「雜体詩」三十首(『文選』卷三十一)「潘黃門 述哀 岳」に「俯仰未能弭、尋念非但一(俯仰して未だ弭むる能はず、尋念すること 但だ一のみに非ず)」とあり、陳・陰鏗「広陵岸送北使」詩に「定知能下淚、非但一楊朱(定めて知る 能く涙を下すは、但だ一楊朱のみに非ざるを)」とある。

【執金吾】阮卓「長安道」第5句「騎転金吾度」【語釈】参照。

陳・陳暄「長安道」

【本文及び書き下し】

- 1 長安開繡陌 長安 繡陌開き
- 2 三条向綺門 三条 綺門に向かふ
- 3 張敞車單馬 張敞 車 單馬にして
- 4 韓嫣乘副軒 韓嫣 副軒に乗る
- 5 寵深來借殿 寵 深く 来たりて殿を借り
- 6 功多競買園 功 多く 競ひて園を買ふ
- 7 將軍夜夜返 將軍 夜夜 返り
- 8 絃歌著曙喧 絃歌 曙に著るまで喧し

【日本語訳】

1 長安では刺繡のように鮮やかで美しい道が開け

- 2 三本の大通りが青綺門へと向かっている
- 3 張敞は車が一頭立てだったか
- 4 韓嫣は天子の副車に乗った
- 5 董賢は天子の寵愛が深いことをいいことに、宮殿に間借りしたも同然だったし
- 6 蕭何は多くの功績があったが、保身のために田園を買い求めた。
- 7 右將軍張安世たちが夜ごとお屋敷に帰って来ると
- 8 琴瑟の音と歌声が夜明けまでずっと賑やかに響きわたる

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷百十六。

0 「陳暄」、「英華」作「陳晤」。

6 「買」、「詩紀」作「置」。

【押韻】

「門」、上平二十三魂韻。「軒」「園」「喧」、上平二十二元韻。元・魂同用。

【作者】

生没年不詳。後主が東宮にあつた時、招かれて学士となり、即位すると江総・孔範らと禁中での宴席に侍り、狎客と呼ばれた。至徳末(五八五頃)、後主からひどい扱いを受け恠死した。詩四首が現存し、いずれも『樂府詩

集』に収める。

【語釈】

1 長安開繡陌 2 三条向綺門

「繡陌」刺繡のように美しい街路。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「三条」三本の大通り。前にも引いた班固「西都賦」に「披三条之広路、立十二之通門。（三条の広路を抜き、十二の通門を立つ。）とあった。

「綺門」美しい門。恐らく「青綺門」のことだろう。『三輔黄図』巻一「都城十二門」に「長安城東出南頭第一門曰霸城門、民見門色青、名曰青城門、或曰青門。…『廟記』曰、『霸城門、亦曰青綺門』。（長安城東出南頭に出づるの第一門を霸城門と曰ひ、民門の色の青きを見て、名づけて青城門と曰ひ、或いは青門と曰ふ。…『廟記』に曰く、『霸城門、亦た青綺門と曰ふ』と。）とある。

3 張敞車單馬

4 韓嫣乘副軒

「張敞」顧野王「長安道」第3句「章台京兆馬」【語釈】参照。

「單馬」ここは張敞の馬車は一頭立てだったと意味だろうが、六朝詩には他の用例は見当たらない。史書に多く見える「單馬」は「單騎」の意のようである。

「韓嫣」漢の人。武帝に寵愛され、武帝が上林苑で狩り

を行う時には「副車」に乗ることを許されていた。『漢書』倭幸伝・韓嫣に「韓嫣字王孫、弓高侯積当之孫也。武帝為膠東王時、嫣与上學書相愛。及上為太子、愈益親嫣。嫣善騎射、聰慧。上即位、欲事伐胡、而嫣先習兵、以故益尊貴、官至上大夫、賞賜擬鄧通。始時、嫣常与上共臥起。江都王入朝、從上獵上林中。天子車駕遶道未行、先使嫣乘副車、從數十百騎馳視獸。江都王望見、以為天子、辟從者、伏謁道旁。嫣驅不見。既過、

江都王怒、為皇太后泣、請得婦人入宿衛、比韓嫣。太后繇此銜嫣。嫣侍、出入永巷不禁、以姦聞皇太后。太后怒、使使賜嫣死。上為謝、終不能得、嫣遂死。（韓嫣字は王孫、弓高侯積当の孫なり。武帝 膠東王為りし時、嫣 上と書を學びて相ひ愛す。上の太子と為るに及び、愈いよ益ます嫣に親しむ。嫣 騎射を善くし、聰慧たり。上 位に即き、胡を伐つを事とせんと欲して、嫣 先んじて兵を習ひ、故を以て益ます尊貴せられ、官 上大夫に至り、賞賜 鄧通に擬せらる。始めの時、嫣 常に上と臥起を共にす。江都王 朝に入り、上に従ひて上林中に獵す。天子の車駕 遶道するも未だ行かず、先づ嫣をして副車に乗り、数十百騎を從へ馳せて獸を視しむ。江都王 望見し、以て天子と為し、從者を辟けしめ、伏せて道旁に謁す。嫣 驅けて見ず。既に過ぎ、江都王 怒り、皇太后に泣き、婦人して宿衛に入り、韓嫣に比ぶを得んことを請ふ。太后 此れに繇りて嫣を銜む。嫣 侍し、永巷に出入して禁ぜら

れず、姦を以て皇太后に聞こゆ。太后 怒り、使ひをして嫣に死を賜はらしむ。上 為に謝すも、終に得る能はず、嫣 遂に死す。」とある。

「副軒」天子のお付きの者が乗る車。右の『漢書』の記事に見えた「副車」をいう。「軒」は貴人が乗る車。六朝詩には他の用例は見当たらない。

5 寵深來借殿

6 功多競買園

「寵深來借殿」董賢は天子の寵愛が深いことをいいことに、その妻までが籍なだによつて宮中に出入りが許され、宮殿に間借りしたも同然だった。『漢書』倭幸伝・董賢に「毎賜洗沐、不肯出、常留中視医薬。上以賢難歸、詔令賢妻得通引籍殿中、止賢廬、若吏妻子居官寺舍。（洗沐を賜る毎に、肯へて出でず、常に中に留まりて医薬を視る。上 賢の歸るを難なだずるを以て、詔して賢の妻をして籍を殿中に通引し、賢の廬に止まるを得しむるは、若吏の妻子の居官寺の舍に居るが若し。）」と見える故事に拠ると思う。「籍」は門籍のことで、長さ二尺、竹製で姓名、年齢、身分などを記入しておき、宮殿に出入りする際に宮殿の門前に掛けた。「籍」は「借」に通じるので「借殿」という表現をしたのだらう。

「功多競買園」蕭何には多くの功績があったが、高祖の疑いを免れるために田畑を買い求めた。『史記』蕭相国世家に「漢十二年秋、黥布反、上自将擊之、数使使問

相国何為。相国為上在軍、乃拊循勉力百姓、悉以所有佐軍、如陳豨時。客有說相国曰、『君滅族不久矣。夫君位為相国、功第一、可復加哉。然君初入関中、得百姓心、十余年矣、皆附君、常復孽孽得民和。上所為数問君者、畏君傾動関中。今君胡不多買田地、賤貨貸以自汗。上心乃安』。於是相国從其計、上乃大説。（漢の十二年秋、黥布 反き、上 自ら将めて之れを撃ち、数しば使ひをして相国 何をか為すと問はしむ。相国 上の軍に在るが為に、乃ち拊循ふくんして百姓を勉力せしめ、悉く有する所を以て軍を佐たすくること、陳豨の時の如し。客に相国に説く有りて曰く、『君 族を滅ぼさるること久しからず。夫れ君 位は相国為りて、功は第一、復た加ふべけんや。然れども君 初め関中に入り、百姓の心を得ること、十余年、皆な君に付き、常に復た孽孽として民の和を得たり。上 数しば君に問ふ所為の者は、君の関中を傾動せんことを畏るればなり。今 君 胡ぞ多く田地を買ふに、賤く貨貸して以て自ら汗あせさざる。上 心 乃ち安んぜん』と。是に於いて相国 其の計に従ひ、上 乃ち大いに説ぶ。）とある故事に拠る。

7 將軍夜夜返

8 絃歌著曙喧

「將軍」直接には右將軍張安世を指すが、実際には梁簡文帝「長安道」に「金張及許史、夜夜尚留賓（金・張及び許・史、夜夜 尚ほ賓を留む）」と見えた金日磾

と張安世、許広漢と史恭、史高父子など富貴の人々をいうと思われる。

〔昨夜〕夜ごと夜ごと。梁簡文帝「長安道」、陳後主「長安道」にも見えた。

〔絃歌〕琴瑟の音と歌声。「絃歌」とも。「古詩十九首」其五に「上有絃歌声、音響一何悲（上に絃歌の声有り、音響 一に何ぞ悲しき）」とある。また庾信「奉和永豐殿下言志」詩十首其四に「来往金張館、絃歌許史閭（来往 金張の館、絃歌 許史の閭）」とあるのはこのこと似た発想かと思われる。

〔著曙〕明け方までずっと。王雲路『六朝詩歌語詞研究』（黒龍江教育出版社 一九九九）に、

「著」是動詞、至・到之義。転為介詞、也有此義。

『宋詩』卷十一「清商曲辭・華山畿」「啼著曙、淚落枕將浮、身沈被流去」。『陳詩』卷四陳後主叔室「自君之出矣」「思君如夜燭、垂淚著鷄鳴」。又卷六陳暄「長安道」「將軍夜夜返、絃歌著曙喧」。又卷七江總「烏棲曲」「隴西上計応行去、城南美人啼著曙」。

「著曙」「著鷄鳴」皆謂到天亮。（著）は動詞であり、至・到という意味である。転じて介詞となっても、やはりこの意味がある。『宋詩』卷十一「清商曲辭・華山畿」に「啼きて曙に著り、涙落ちて 枕將に浮かんとし、身は沈みて 被 流れ去る」と。『陳詩』卷四陳後主叔室「自君之出矣」に「君を思ふこと 夜燭の如く、涙を垂れて鷄鳴に著る」と。

また卷六陳暄「長安道」に「將軍 夜夜 返り、^(ツマ) 絃歌 曙に著るまで喧し」と。また卷七江総「烏棲曲」に「隴西の上計 応に行き去るべく、城南の美人 啼きて曙に著る」と。「著曙」「著鷄鳴」はいずれも夜明けまでのことである。

陳・江総「長安道」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|---------------|
| 1 翠蓋乗輕露 | 翠蓋 輕露を乗せ |
| 2 金羈照落暉 | 金羈 落暉に照る |
| 3 五侯新拜罷 | 五侯 新たに拜せられ罷はり |
| 4 七貴早朝帰 | 七貴 早に朝より帰る |
| 5 轟轟紫陌上 | 轟轟たり 紫陌の上 |
| 6 藹藹紅塵飛 | 藹藹として 紅塵 飛ぶ |
| 7 日暮延平客 | 日暮 延平の客 |
| 8 風花払舞衣 | 風花 舞衣を払ふ |

【日本語訳】

- 1 カワセミの羽で飾った車蓋に小さな露が乗り
- 2 金で飾ったおもいが夕陽に輝く
- 3 権貴の五人は諸侯に封ぜられたばかり
- 4 外戚の七つの家の人々は早々と朝廷から帰って来る
- 5 都の美しい通りにゴロゴロと大きな音が鳴り響き
- 6 舞い上がる砂塵が広がっていく

7 日が沈もうとする頃、宝剣を持った若者が舞い
8 風に吹かれた花が踊りの衣装をかすめる

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷百十四。

1 「乗」、「詩紀」作「承」。「露」、「英華」作「霧」、注云「一作『露』」。

7 「平」、「英華」作「年」、注云「一作『平』」。

【押韻】

「暉」「帰」「飛」「衣」、上平八微韻。

【作者】

五一九〇五九四。六朝後期の文人。梁、陳、隋に仕えた。字は総持。済陽郡考城（河南省蘭考県）の人。名門に生まれ、十八歳で武陵王蕭紀の法曹参軍として初めて出仕した。後、梁の武帝にその詩才を高く評価された。太清二（五四八）年、徐陵とともに東魏への使者に扱ばれたが、病気を理由に辞退した。間もなく侯景の乱が起これり都建康が陥落すると、江総は会稽へ、さらに嶺南へと難を避け、以後十数年を広州で過ごした。陳の天嘉四（五六三）年、文帝により中書侍郎として召還され、文帝、宣帝に仕えた。五八三年、後主が即位すると江総はその信任を得て高官を歴任し、至徳四（五八六）年には尚書令（宰相）となった。江総は宰相の位にあつても政

治に関与せず、後主と日夜酒宴を張り詩文を作つて楽しむばかりで、陳後主の「狎客」とされ、亡国の一因となつたことを批判される。禎明三（五八九）年、隋が陳を滅ぼすと、隋に仕え上開府となり、開皇十四（五九一）年に卒した。

江総は亡国の臣としてその政治姿勢を非難されることが多いが、宮廷詩人として活躍し、艶麗な作風が大いにもてはやされた。一方、熱心な仏教信者であつたため、山中の仏寺を訪れた際の作品をいくつか残しており、そこには優れた山水描写が見られる。今、百首あまりが伝わる。

【語釈】

1 翠蓋乗輕露 2 金羈照落暉

〔翠蓋〕カワセミの羽で飾った車蓋。楊雄「甘泉賦」〔「文選」卷七〕に「流星旄以電燭兮、咸翠蓋而鸞旗。（星旄を流して以て電のごとく 燭き、咸く翠蓋にして鸞旗なり。）」とあり、李善注は宋玉「高唐賦」〔「文選」卷十九〕に「蜺為旌、翠為蓋。（蜺を旌と為し、翠を蓋と為す。）」とあるのを引く。「高唐賦」李善注は「翠、翡翠也。以羽飾蓋。（翠、翡翠なり。羽を以て蓋を飾る。）」との注がある。また、漢・辛延年「羽林郎」詩〔「玉台」卷一〕に「銀鞍何昱爚、翠蓋空脚蹠（銀鞍 何ぞ昱爚たる、翠蓋 空しく脚蹠す）」と。

〔輕露〕小さな露。晋・張協「雜詩」十首〔「文選」卷二

十九) 其二に「飛雨灑朝蘭、輕露棲叢菊(飛雨 朝蘭に灑ぎ、輕露 叢菊に棲まる)」と。

「金羈」金で飾ったおもがい。曹植「白馬篇」に「白馬飾金羈、連翩西北馳(白馬 金羈を飾り、連翩として西北に馳す)」とあるように幽并の游侠児が乗る馬をいう。

「落暉」夕陽。陸機「擬東城一何高」詩(『文選』卷三十)に「三閭結飛轡、大臺嗟落暉(三閭結飛轡、大臺嗟落暉)」と。

3 五侯新拜罷 4 七貴早朝帰

「五侯」漢の成帝に時を同じくして侯に封じられた王譚、王立、王根、王逢時、王商の五人。權貴の人々をいう。鮑照「救詩」(『文選』卷三十)に「五侯相餞送、高会集新豐(五侯 相ひ餞送し、高会して新豐に集まる)」とあり、李善注は『漢書』元后伝に「明年、河平二年、上悉封舅譚為平阿侯、商成都侯、立紅陽侯、根曲陽侯、逢時高平侯。五人同日封、故世謂之『五侯』。(明年、河平二年、上 悉く舅の譚を封じて平阿侯、商を成都侯、立を紅陽侯、根を曲陽侯、逢時を高平侯と為す。五人 日を同じくして封ぜらる、故に世 之れを『五侯』と謂ふ。)」とあるのを引く。

「新拜罷」ある官職に任命されたばかり。『漢書』車千秋伝に「後漢使者至匈奴、单于問曰、『聞漢新拜丞相、何用得之』。(後 漢の使者 匈奴に至り、单于 問ひて

曰く、『聞く 漢 新たに丞相を拜すと、何を用て之れを得たるか』と。使者 曰く、『上書を以て事故を言へばなり』と。)」とあり、詩では庾信「結客少年場行」に「今年喜夫婿、新拜羽林郎(今年 喜ぶ 夫婿の、新たに羽林郎に拜せらるるを)」と。

「七貴」漢代、外戚として權勢を振るつた七つの家柄。呂、霍、上官、趙、丁、傅、王の七姓をいう。やはり權貴の人々をいう。潘岳「西征賦」(『文選』卷十)に「窺七貴於漢庭、譚一姓之或在。(七貴を漢庭に窺ふに、譚か一姓の在る或らんや。)」と見え、梁・戴嵩「煌煌京洛行」に「五侯同拜爵、七貴各垂纓(五侯 同に爵を拜し、七貴 各おの垂纓を垂る)」、沈炯「長安少年行」に「五侯俱拜爵、七貴各論功(五侯 俱に爵を拜し、七貴 各おの功を論ぜらる)」と「五侯」と対で用いられている。

「朝帰」朝廷から帰って来る。鮑照「擬古」詩三首(『文選』卷三十一)其二「日晏罷朝帰、鞍馬塞衢路(日 晏れ 朝を罷めて帰れば、鞍馬 衢路を塞ぐ)」と。

5 轟轟紫陌上 6 藹藹紅塵飛

「轟轟」大きな音が響きわたる様。左思「蜀都賦」(『文選』卷四)「車馬雷駭、轟轟闐闐。(車馬 雷のごとく 駭き、轟轟闐闐たり。)」と見えるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「紫陌」都の郊外の道。王粲「羽獵賦」に「濟漳浦而横

陣、倚紫陌而並征。(漳浦を濟りて陣を横たへ、紫陌に倚りて並び征く。)」とあり、劉孝綽「春日從駕新亭応制」詩に「紆余出紫陌、迤邐度青樓(紆余として紫陌を出で、迤邐として青樓に度る)」とある。

「藹藹」雲や霧が広がっている様。鮑照「采桑」詩(『玉台』卷四)に「藹藹霧滿闌、融融景盈幕(藹藹 霧闌に滿ち、融融 景幕に盈つ)」と。

「紅塵」梁元帝「長安道」第6句「槐路起紅塵」【語釈】参照。

7 日暮延平客 8 風花松舞衣

「日暮」蕭賁「長安道」第8句「日暮与淹留」【語釈】参照。

「延平客」宝劍を手にした若者。「延平」は渡し場の名。今の福建省南平市にあった。『晋書』張華伝に「初、呉之未滅也、斗牛之間常有紫氣、道術者皆以呉方強盛、未可図也、惟華以為不然。及呉平之後、紫氣愈明。華聞豫章人雷煥妙達緯象、乃要煥宿、屏人曰、『可共尋天文、知將來吉凶』。因登樓仰觀、煥曰、『僕察之久矣、惟斗牛之間頗有異氣』。華曰、『是何祥也』。煥曰、『宝劍之精、上徹於天耳』。華曰、『君言得之。吾少時有相者言、吾年出六十、位登三事、当得宝劍佩之。斯言豈效与』。因問曰、『在何郡』。煥曰、『在豫章豐城』。華曰、『欲屈君為宰、密共尋之、可乎』。煥許之。華大喜、即補煥為豐城令。煥到県、掘獄屋基、入地四丈余、得

一石函、光氣非常、中有双劍、並刻題、一曰龍泉、一曰太阿。其夕、斗牛間氣不復見焉。煥以南昌西山北巖下土以拭劍、光芒艷發。大盆盛水、置劍其上、視之者精芒炫目。遣使送一劍並土与華、留一自佩。或謂煥曰、『得而送一、張公豈可欺乎』。煥曰、『本朝將乱、張公当受其禍。此劍当繫徐君墓樹耳。靈異之物、終当化去、不永為人服也』。華得劍、宝愛之、常置坐側。華以南昌士不如華陰赤土、報煥書曰、『詳觀劍文、乃干将也、莫邪何復不至。雖然、天生神物、終当合耳』。因以華陰土一斤致煥。煥更以拭劍、倍益精明。華誅、失劍所在。煥卒、子華為州從事、持劍行經延平津、劍忽於腰間躍出墮水、使人没水取之、不見劍、但見兩龍各長數丈、蟠縈有文章、没者懼而反。須臾光彩照水、波浪驚沸、於是失劍。華歎曰、『先君化去之言、張公終合之論、此其驗乎』。(初め、呉の未だ滅びざるや、斗牛の間 常に紫氣有り、道術の者 皆な以へらく 呉 方に強盛にして、未だ図るべからざるなりと、惟だ華のみ以為へらく 然らずと。呉の平ぐの後に及び、紫氣 愈いよ明らかなり。華 豫章の人 雷煥の緯象に妙達するを聞き、乃ち煥を要めて宿せしめ、人を屏けて曰く、『共に天文を尋ねて、將來の吉凶を知るべし』と。因りて樓に登り仰ぎ觀て、煥 曰く、『僕 之れを察すること久し、惟だ斗牛の間 頗る異氣有り』と。華 曰く、『是れ何の祥なるか』と。煥 曰く、『宝劍の精、上りて天に徹するのみ』と。華 曰く、『君の言 之れ

を得たり。吾 少き時 相者の言ふ有り、吾 年 六十を出でて、位 三事に登り、当に宝剣を得て之れを佩ぶべしと。斯の言 豈に效あるか』と。因りて問ひて曰く、『何れの郡にか在る』と。煥 曰く、『豫章の豊城に在らん』と。華 曰く、『君を屈して宰と為し、密かに共に之れを尋ねんと欲す、可ならんか』と。煥 之れを許す。華 大いに喜び、即ち煥を補して豊城の令と為す。煥 県に到り、獄屋の基を掘るに、地に入るに 四丈余、一石函を得、光氣 常に非ずして、中に双剣有り、並びに題を刻み、一を龍泉と曰ひ、一を太阿と曰ふ。其の夕、斗牛の間 氣 復た見えず。煥 南昌の西山の北巖の下に土を以て以て剣を拭へば、光芒 艶発す。大盆に水を盛り、剣を其の上に置くに、之れを視る者 精芒 目に炫し。使ひを遣はして一劍 並びに土を送りて華に与へしめ、一を留めて自ら佩ぶ。或るひと 煥に謂ひて曰く、『両を得て一を送る、張公 豈に欺くべけんや』と。煥 曰く、『本朝 將に乱れんとし、張公 当に其の禍を受くべし。此の劍 当に徐君の墓樹に繋ぐべきのみ。靈異の物、終に當に化し去るべく、永く人に服せられざるなり』と。華 劍を得て、之れを宝愛し、常に坐側に置く。華 以へらく 南昌の土 華陰の赤土に如かずと、煥に書を報じて曰く、『詳かに劍文を観るに、乃ち干将なり、莫邪 何ぞ復た至らざる。然りと雖も、天生の神物、終に當に合ふべきのみ』と。因りて華陰の土一斤を以

6 停車対両童 車を停めて 両童対す
7 喧喧許史座 喧喧たり 許・史の座
8 鍾鳴賓未窮 鍾 鳴るも 賓 未だ窮まらず

【日本語訳】

1 エンジュが植えられた大通りが北闕の側にある側近の住居をめぐり
2 天子専用の道が西側の宮殿につながっている
3 道いっばいに行き交う人々の袖がエンジュの木陰に連なり
4 道を歩く人々の衣裳が起こす風が、往来する馬車がたてる土埃を舞い上げる
5 桑摘みの美しい娘が五頭立ての馬車に乗る長官に出逢い
6 車を停めたまま二人の若者がいつまでも互いのことを問うている
7 にぎやかなものだ、許氏や史氏のような貴顕の宴席は8 日暮れを知らせる鐘が鳴っても賓客の訪問が途切れることはない

【校勘】

○『古詩紀』卷百二十三。
0 底本注云、「原列在僧貫休下、今提前」。
異同無し

て煥に致す。煥 更に以て剣を拭へば、倍益精明なり。華 誅せられて、劍の在る所を失ふ。煥 卒し、子の華 州從事と為り、劍を持して行き延平津を経るや、劍 忽ち腰間より躍り出でて水に墮ち、人をして水に没して之れを取らしむるに、劍を見ず、但だ兩龍の各おの長さ数丈、蟠縈して文章有るを見、没する者 懼れて反る。須臾にして光彩 水を照らし、波浪 驚沸し、是に於いて失劍を失ふ。華 歎きて曰く、『先君の化し去るの言、張公の終に合はんの論、此れ其の驗か』と。』と見える故事に拠る。

「風花」風に吹かれていた花。『宋書』樂志四に引く「白紵舞歌」に「陽春白日風花香、趨步明玉舞瑤瑤（陽春 白日 風花の香、趨歩 明玉 瑤瑤を舞はず）」と見える。

「舞衣」踊り手が纏う衣服。鮑照「代陳思王京洛篇」(『玉台』卷四作「代京雒篇」)。「琴筑縱橫散、舞衣不復縫（琴筑 縱横に散じ、舞衣 復た縫はず）」と。

北周・王褒「長安道」

【本文及び書き下し】

1 槐衢回北第 槐衢 北第を回り
2 馳道度西宮 馳道 西宮に度る
3 樹陰連袖色 樹陰 袖色に連なり
4 塵影雜衣風 塵影 衣風を雜ふ
5 採桑逢五馬 桑を採りて五馬に逢ひ

【押韻】

「宮」「風」「童」「窮」、上平一東韻。

【作者】

五一三?〜五七六?。字は子淵、琅邪臨沂(山東省臨沂市)の人。梁の武帝はその才能を愛し、弟の潘陽王蕭恢の娘と娶せた。元帝の時には吏部尚書・左僕射に任じられた。承聖三(五五四)年、西魏の軍が江陵を陥落させると、降伏して長安に至る。庾信と並び称され、北朝でも優遇された。陳と北周とが和睦すると多くの南朝出身の文人が南方に帰ったが、庾信と王褒だけは帰ることができなかった。

梁にいた頃は華麗な詩風であったが、北朝に入ってから関塞を描いた詩を多く残した。『周書』『北史』『梁書』に伝がある。

【語釈】

1 槐衢回北第 2 馳道度西宮

「槐衢」エンジュが植えられた大通り。梁元帝「長安道」第6句に「槐路」の語が見えた。「衢」は四方八方に続く道。

「北第」北闕近くの邸宅。「北闕」は顧野王「長安道」第6句「北闕董賢家」と見えた。『漢書』夏侯嬰伝に「惠帝及高后德嬰之脱孝惠・魯元於下邑間也、乃賜嬰北第第一、曰『近我』以尊異之。(惠帝 及び高后 嬰の

孝惠・魯元を下邑の間より脱くを徳とするや、乃ち嬰に北第の第一を賜ひて、曰く『我に近づけ』と、以て之れを尊異す。」とあり、顔師古注は「北第者、近北闕之第、嬰最第一也。故張衡『西京賦』云、『北闕甲第、当道直啓』。(北第は、北闕に近きの第、嬰 最も第一なり。故に張衡『西京賦』に云ふ、『北闕の甲第、道に当たりて直ちに啓く』と。)」とする。

【馳道】阮卓「長安道」第1句「長安馳道上」【語釈】参照。

【西宮】西側の宮殿。未央宮が相当すると思われる。陳後主「長安道」第1句に「建章通未央」とあった。

3 樹陰連袖色 4 塵影雜衣風

【樹陰】ここは、第1句「槐衢」を承け、道の傍らに植えられたエンジュが作る日陰。「樹蔭」とも。謝朓「奉和隨王殿下」詩十六首其七に「雲生樹陰遠、軒広月容開（雲 生じて 樹陰 遠く、軒 広くして 月容 開く）」と。

【袖色】道を行き交う人々の袖。六朝詩には他の用例は見当たらない。大勢が道幅いっぱい歩くので、袖が道の傍らに植えられたエンジュに振れそうになる。

【塵影】ここは、土埃の中を往来する車馬や人の影。六朝詩には他の用例は見当たらない。

【衣風】行き交う大勢の人々の衣裳が起こす風。戴嵩「煌煌京洛行」に「衣風飄飄起、車塵暗浪生（衣風 飄飄

として起ち、車塵 暗浪のごとく生ず）」と見える。

5 採桑逢五馬 6 停車対両童

【採桑】桑の葉を摘む美しい女性。「採桑」の語は漢・宋子侯「董嬌饒」詩に「不知誰家子、提籠行采桑（知らず 誰が家の子ぞ、籠を提げて行ゆく桑を采る）」と見えるなど、多くの作品に描かれるが、ここは次に引く「陌上桑」を踏まえて秦羅敷を指す。

【五馬】五頭立ての馬車。漢代、州の長官である刺史は使君と呼ばれ、五頭立ての馬車に乗った。漢・無名氏「陌上桑」(『玉台』巻一作「日出東南隅行」)、『宋書』樂志作「艷歌羅敷行」)に「使君從南來、五馬立踟躕(使君 南より来たり、五馬 立ちて踟躕す)」と見える。「陌上桑」は桑摘みの娘、秦羅敷が言い寄る使君をピシヤリとはねつける物語。

【停車】馬車を停めておく。何遜「贈韋記室黯別」詩に「故人儻送別、停車一水東(故人 儻し送別せば、車を停む 一水の東)」とある。

【両童】二人の若者。二句、梁簡文帝「雜句春情」詩(『玉台』卷九)に「両童夾車問不已、五馬城南猶未歸(両童 車を夾み問ひて已まず、五馬 城南 猶ほ未だ帰らず)」とあるのに基づき、「両童」は漢・無名氏「相逢行」(『玉台』巻一作「相逢狭路間」)「相逢狭路間、道隘不容車。不知何年少、夾轂問君家。君家誠易知、易知復難忘(相ひ逢ふ 狭路の間、道 隘くして車を

容れず。知らず 何れか年少なるを、轂を夾みて君の家を問ふ。君の家 誠に知り易く、知り易く復た難忘れ難し)」「(不知何年少)、『玉台』作「如何両少年」)とあるのに拠る。

7 喧喧許史座 8 鍾鳴賓未窮

【喧喧】徐陵「長安道」第7句「喧喧擁車騎」【語釈】参照。

【許史】梁簡文帝「長安道」第7句「金張及許史」【語釈】参照。

【鍾鳴】阮卓「長安道」第2句「鍾鳴宮寺開」【語釈】参照。

【賓未窮】梁簡文帝「長安道」第8句に「夜夜尚留賓」とあった。

隋・何妥「長安道」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|-------|----------------------------|
| 1 長安狹斜路 | 長安 | 狹斜の路 |
| 2 縱横四達分 | 縱横 | 四達 分かる |
| 3 車輪鳴鳳轄 | 車輪 | 鳳轄を鳴らし |
| 4 箭服耀魚文 | 箭服 | 魚文を耀 <small>かがや</small> かす |
| 5 五陵多任俠 | 五陵 | 任俠多く |
| 6 輕騎自連群 | 輕騎 | 自ら群を連ぬ |
| 7 少年皆重氣 | 少年 | 皆な氣を重んず |
| 8 誰識故將軍 | 誰か識らん | 故の將軍を |

【日本語訳】

- 1 長安には狭い裏通りがあつて
- 2 南北と東西に整然と大通りが延びている
- 3 車輪のくびきからは飾りの鳳凰が鳴き声が聞こえ
- 4 矢袋には魚の模様が輝く
- 5 五陵には男伊達がたくさんいて
- 6 輕装の馬に跨がってグループを作っている
- 7 若者たちはみな心意氣を重んじていて
- 8 もとの將軍など眼中にない

【校勘】

○『古詩紀』卷百三十一。

異同無し

【押韻】

「分」「文」「群」「軍」、上平一東韻。

【作者】

五二三？～五九三？。隋代の学者、詩人。字は栖鳳。十七歳の時、梁に仕え、その後、北周、隋に仕えた。隋の文帝が即位すると国子博士に除せられた。開皇(五八一～六〇〇)末年、国子祭酒となり官に卒した。『周易講疏』十三卷などの著作の他に『文集』十卷があつた。現存する詩は六首。

【語釈】

1 長安狹斜路 2 縦横四達分

「狹斜」顧野王「長安道」第8句「安能訪狹斜」【語釈】参照。

「縦横」南北と東西。道が整然と四方に伸びている様子をいう。陳後主「洛陽道」五首其三に「縦横肆八達、左右闢康莊（縦横 八達を肆べ、左右 康莊を闢く）」とある。

「四達」四方に通じる道。或いは四方に広がる。『爾雅』釈宮に「一達謂之道路、二達謂之歧旁、三達謂之劇旁、四達謂之衢。（一達 之れを道路と謂ひ、二達 之れを歧旁と謂ひ、三達 之れを劇旁と謂ひ、四達 之れを衢と謂ふ。）」とある。宋・謝瞻「張子房」詩（『文選』卷二十一）に「四達雖平直、蹇歩愧無良（四達 平直なりと雖も、蹇歩にして良きこと無きを愧づ）」と見え、李善注は『礼記』樂記に「若此則周道四達、礼樂交通。（此くの若くにして則ち周道 四達し、礼樂 交通す。）」とあるのを引く。江総「洛陽道」二首其二に「小平路四達、長秋聽五鐘（小平に 路 四達し、長秋に五鐘を聴く）」とあった。

3 車輪鳴鳳轄 4 箭服耀魚文

「車輪」曹操「苦寒行」（『文選』卷二十七）に「羊腸坂詰屈、車輪為之摧（羊腸 坂 詰屈たり、車輪 之れ

が為に摧かる）」と。

「鳳轄」鳳凰の絵で飾られた車軸をとめるためのくびき。六朝詩には他の用例は見当たらない。この語については、橘英範氏が既に、

「鳳轄」、鳳凰の飾りのついた轄（車輪が車軸から外れるのを防ぐためのくさび）をいうのであろう。六朝の詩における用例は、他に梁の蕭鈞の「晚景遊泛懷友」（『初學記』18）に「龍門御溝に依り、鳳轄芳洲に転ず（龍門依御溝、鳳轄転芳洲）」と見えるのみ。ただし、明の馮惟訥の『古詩紀』85は、唐代にも蕭鈞という人物がおり、この詩の詩風は唐人に似るので、唐の蕭鈞の作であろうと指摘している。

この「鳳轄」に関しては、唐の韋綯の『劉賓客嘉話錄』に、漢の宣帝が霍光に賜った車の轄の鳳凰の飾りが、夜ごとに飛び去っては朝になって戻っていたところ、ある時途中で羅にかかったという『伝記』の話が記されており、嵇康もそれを踏まえて「翩翩たる鳳轄、此の網羅に逢ふ（翩翩鳳轄、逢此網羅）」の句を作っているという。同じ話の出典を『北堂書鈔』141・『太平広記』400は梁の呉均の『続齊諧記』としており、実際に現行の『続齊諧記』にはこの話が収められている。また、馮惟訥『古詩紀』121もこの詩の末尾に「鳳轄は、霍光の事を用ふ（鳳轄、用霍光事）」と注している。

ただ、嵇康にこの句が見えないばかりでなく、管見の及んだ限りでは、六朝を通じてこの故事を踏まえた

例は未見であり、先に引いた蕭鈞の句も明らかに故事を踏まえているという訳ではない。この話は『続齊諧記』を除けば、六朝期の資料に見えていないため、唐に入って生み出された話で、後の人が『続齊諧記』の話と誤った可能性も皆無ではなさそうだ。少なくとも六朝期にはほとんど知られていない故事であった可能性は高いと思われる。ここでも、単に豪華な車を表現するのに用いられた可能性もあるのではないだろうか。

と「六朝期『長安道』に詠じられた長安」で詳細に分析を加えておられる。首肯すべき結論だろう。

「箭服」えびら。矢を入れて背負う矢袋。「箭箠」とも。劉孝威「結客少年行」に「居延箭箠尽、疏勒井泉枯（居延 箭箠 尽き、疏勒 井泉 枯る）」と。

「魚文」魚を描いた模様。梁簡文帝「『大法頌』序」に「緑弓黄弩、象飾魚文。（緑弓黄弩、魚文を象飾す。）」と見える。

5 五陵多任侠 6 輕騎自連群

「五陵」長陵・安陵・陽陵・茂陵・平陵の五つの陵墓をいう。ここには富豪や外戚を住まわせたことから、遊俠少年たちが闊歩する街というイメージができた。宋・袁淑「效曹子建白馬篇」（『文選』卷三十一）に「劍騎何翩翩、長安五陵間（劍騎 何ぞ翩翩たる、長安 五陵の間）」とあり、李善注は班固「西都賦」（『文

選』卷一）に「若乃觀其四郊、浮遊近界、則南望杜霸、北眺五陵。（若し乃ち其の四郊を觀、近界に浮遊すれば、則ち南に杜霸を望み、北に五陵を眺む。）」とあるのを「西京賦」に誤って引く。「西都賦」の李善注は『漢書』曰、「宣帝葬杜陵、文帝葬霸陵、高帝葬長陵、惠帝葬安陵、景帝葬陽陵、武帝葬茂陵、昭帝葬平陵。」（『漢書』に曰く、『宣帝 杜陵に葬り、文帝 霸陵に葬り、高帝 長陵に葬り、惠帝 安陵に葬り、景帝 陽陵に葬り、武帝 茂陵に葬り、昭帝 平陵に葬る。』）とする。記事はそれぞれの本紀から引く。また、『漢書』游侠伝・原涉に「郡国諸豪及長安五陵諸為氣節者、皆歸慕之。（郡国の諸豪 及び長安五陵の諸もの氣節を為す者、皆な歸して之れを慕ふ。）」と見える。

「任侠」男伊達。強きを挫き弱きを助け、義のためには命をも惜しまない人々。またそのような氣風。『漢書』季布伝に「為任俠有名。（任俠を為して名有り。）」とあり、顔師古注は「任謂任使其氣力。俠之言挾也、以權力俠輔人也。（任 其の氣力を任使するを謂ふ。俠を之れ挾と言ふや、權力を以て人を俠輔すればなり。）」とする。簡文帝「西齋行馬」詩に「任俠稱六輔、輕薄出三河（任俠 六輔に稱せられ、輕薄 三河に出づ）」とある。

「輕騎」輕裝備の騎馬兵。班固「西都賦」に「陳輕騎以行魚、騰酒車以斟酌。（輕騎を陳ねて以て魚を行き、酒車を騰げて以て斟酌す。）」とあり、王褒「燕歌行」

に「属国小婦猶年少、羽林輕騎数征行（属国の小婦猶ほ年少、羽林の輕騎 数しば征行す）」と。
「連群」数が多い。張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「輕死重氣、結党連群。（死を輕んじ氣を重んじ、党を結び群を連ぬ。）」とあるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

7 少年皆重氣 8 誰識故將軍

「少年」若者。ここは曹植「名都篇」（『文選』卷二十七）に「名都多妖女、京洛出少年（名都 妖女多く、京洛 少年を出だす）」と見えるような游俠少年をいう。

「重氣」心意氣を大切にする。右の張衡「西京賦」にも見えた。戴嵩「度閼山」に「博陵輕俠皆無位、幽州重氣本多豪（博陵 俠を輕んじて 皆な位無く、幽州 氣を重んじて 本 豪多し）」とある。

「誰識故將軍」以前將軍だった李広であることを見分けられない。『史記』李將軍列伝に「頃之、家居数歳。広家与故潁陰侯孫屏野。居藍田南山中射獵。嘗夜從一騎出、從人田間飲。還至霸陵亭、霸陵尉醉、呵止広。広騎曰、『故李將軍』。尉曰、『今將軍尚不得夜行、何乃故也』。止広宿亭下。（之れを頃くして、家居すること数歳。広の家 故の潁陰侯の孫と野に屏く。藍田の南山の中に居りて射獵す。嘗て夜 一騎を從へて出で、人に從ひて田間に飲む。還りて霸陵の亭に至り、霸陵の尉 醉ひて、広を呵止す。広の騎 曰く、『故の李將

軍なり』と。尉 曰く、『今の將軍すら尚ほ夜行するを得ず、何ぞ乃ち故なるをや』と。広を止めて亭下に宿らしむ。）」とある故事に拠る。霸陵は蕭賁「長安道」に「前登灞陵道」と見えた。